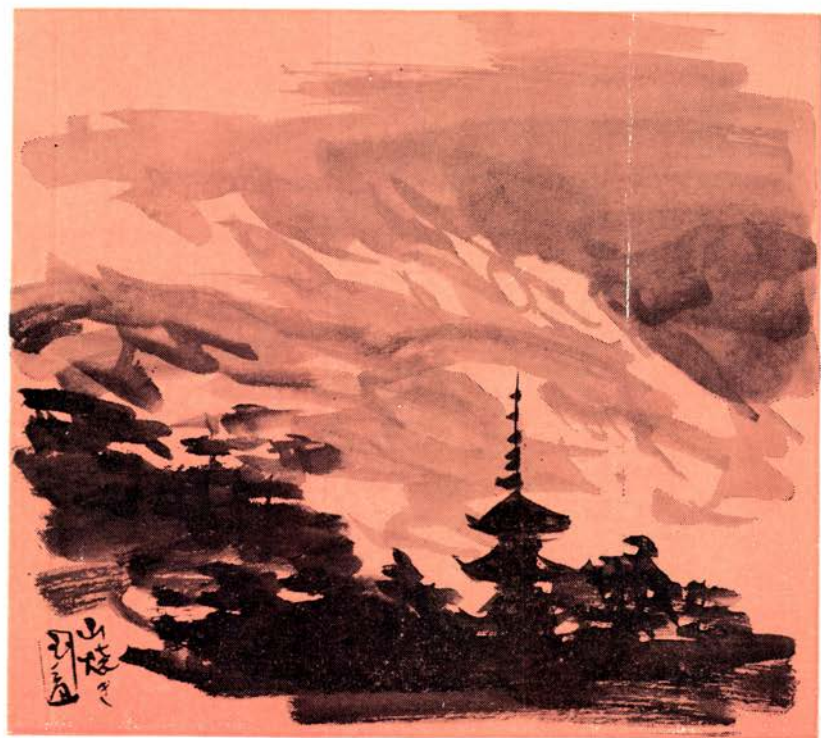


川柳塔

昭和四十一年一月九日
昭和四十一年一月十五日
昭和四十一年一月一日発行
第三種郵便物認可
印刷
（毎月一日発行）



No. 5

二月号

【新発売】



山之内製薬株式会社

東京都中央区日本橋本町2ノ5
大阪・福岡・札幌・名古屋

新 神経疲労回復剤！

バランス

神経も

レジャーがほしい！



● はげしい頭脳労働のため、思考力に疲れをお覚えの方
● お仕事が思うようにゆかなくて、イライラしておいでの方
● 重要な交渉、商談などをひかえて不安なお気持ちの方
ぜひ、バランスをおのみください。

一〇ミリグラム
六カプセル
二二カプセル
三〇カプセル
（はかに医家問大夫）
（発売おのみます）
● お申込、お問い合わせ、試作品を
送付

セドリッド 乗用車専門販売店
ブルバード

尼崎日産自動車株式会社

代表取締役 若木 真彦

本社
尼崎市尾道下ノ川434
TEL. 大阪 (481) 5681 (代)
神戸営業所
神戸市長田区三都町4丁目2-1
TEL. 神戸 6725
明石営業所
明石市船上山8-2
TEL. 明石 5834

姫路営業所
加古川市米田町船頭591
TEL. 加古川 25526
姫路営業所
姫路市市川橋通1丁目13
TEL. 姫路 26145・7820

今月のことば

中島生々庵

◎元旦というものは元旦になってからしか実感は湧かぬ。十二月の初め頃にほんとうの年頭感など書けるものではない筈。

◎元旦になってみるとさすがに清々の氣心改まるものがあり漸次新しい歳の氣分になる

◎聞去明来 明来闇去。とにかく暗くてじめじめした氣持ちは打ち払い、争いや破壊のない世相への悲願を憶う。

◎全速力で回転して居る独楽は一見動いてないように見えるものである。しかしそれは絶対に静止ではない。逆流する若人の血のように脈々とした「いのち」が躍動している。

◎だからといって、これからの毎日毎日を完

全に充実した生き方で生きようとするのは、まことに無謀に近い至難のわざであろう。

◎法然さへも「今日もまたむなしくあけぬ」と歎いたではないか。

◎何気なくふれた本の中から、宿命と宿業という文字の意義が眠にとまった。両者が相似る如くして、実は大変な違いがあることを述べられてゐるのだ。強く心をひかれた。

◎「川柳塔」が初めての新しい歳を迎えた元旦の朝、私は「川柳塔」を通じて私に課せられた使命感というものを静かに考えて見るのであった。

◎うららかな いとお正月ではある。



川柳塔 二月号

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことば……………中島生々庵……………(1)

きょうだい作家……………(30)

— 同人特集 —

若本多久志 選

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵 選……………(4)

北川春巢 選

二つの溝になやむ……………麻生葭乃……………(22)

北米の英訳川柳……………阿部佐保蘭……………(24)

秀句鑑賞……………(前月号から)……………後藤梅志……………(19)

川柳初篇研究……………(三十二)……………(28)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄・
川端柳風・高須啞三味・丸十府・岡田甫・

川柳太平記……………(十二)……………富士野鞍馬……………(42)

北京好日……………(大陸放浪)……………東野大八……………(26)

偶然と平和……………麻生葭乃……………(43)

明治川柳と風俗……………(九)……………奥津啓一朗……………(48)

生駒から鰻谷へ……………麻生葭乃……………(21)

一万歩……………本多柳志……………(44)

東と西に日本一の顔……………不二田一三夫……………(45)

雅号ぶつちやけばなし……………有働芳仙……………(44)

処生庁言……………那谷光郎……………(45)

近作柳樽……………唐崎專翁……………(48)

大萬川柳「抜け道」……………川村好郎……………(38)

金泥集……………菊沢小松園……………(52)

作句教室……………清水白柳……………(46)

★柳界展望……………麻生葭乃……………(49)

★本社一月句會……………清水白柳……………(52)

★各地柳壇……………(庸佑)……………(56)

……………(文秋)……………(59)

一路集……………西出一栄……………(50)

……………弘津柳慶……………(50)

……………本田恵二朗……………(64)

★編集後記……………白柳・二三夫……………(64)



岡山市 服部十九平

相談に來た娘アカハタ置いて去に
石段の下にも賽銭箱を置き

メートルを尺になおして祖母老いず

一番に奇禍へ債主がかけつける

虚無僧はスタイルだけが写される

大阪市 橘高薫風

福寿草父子兄弟に似たりけり

弱きわればかり出てくる夢の中

片思い海辺の白砂つけて去る

慈善鍋真正銘銭の音

君大納言僕中納言新春の酒

高槻市 若柳潮花

御ひいきへ自分を守る智恵がつき

若本多久志選

中島生々庵選

北川春巢選

よし不義であろうと舞台だけの恋

小鉢もの師匠と弟子の仲で呑み

子供もう女としての帯をしめ

膝に抱く猫の温みももう師走

大阪市 中島小石

劫の深さか失神から蘇がえり

気の弱いつまらぬ言葉も気にかかり

思うことずばりと言いぬ子の若さ

ヒスイのごと澄める心を探しあぐむ

我女愚痴の多きをさとりつつ

岸和田市 内藤きさ子

絵のような柿の木へまだ射す夕陽

甘栗の袋むかしのままで良し

小雀のお目にとまつたみみずの子

右手使う仕事右手の冷える朝

あかぎれの拇印がうすい領収書

倉敷市 田垣方大

新社長訓辞ばかりやりたがり

男の友情妻の涙に崩れ去り

けとばせば猫も野性にかえりたり

雑草が一番早く青をみせ

麦（むぎ）踏んで雲の心にとけこめり

高槻市 傍島静馬

にんにくに動きもならぬ満員車

賞状より何んぼ貰うたが気にかかり

皇族に生れむつかしい名をもらい

天井がつかえてビルは地下に伸び

精密検査してからあちこち痛くなり

大阪市 金井文秋

ボーナスが出るのを商売人も待ち

電話ひきましただけの電話をかけてくる

服を買う予算ないのに太り過ぎ

きびしさを肌を感じる金を借り

愛想よい税吏急所はちゃんと突き

岡山市 浜田久米雄

忌憚なく話す会議が行きつまり

春を待つところ二月を着ぶくれる

幼子の目へカキ餅がよくふくれ

うまければうまいと妻の味をほめ

けんそんをしているえくぼ美しい

青森市 工藤甲吉

霞たばしりストリツパーにわく旅愁

冬の星冴えて父ちゃん今帰る

下足札などはいらない俺の靴

ざわざわと暮らし一年早過ぎる

ひたむきな恋は香車のその如く

岡山市 直原七面山

死を想う日あり妻子に先立たれ

自己診断を医者は笑うて聞いて呉れ

恋情を綴るに日本語まだ足らず

許すまで待つ気長さに女負け

好きだからだからチラチラ見せる隙き

島根県 藤井明朗

心気一転停年の春 夢太し

順々と朝の戸が開く社宅街

みんな出てほつと一息主婦の朝

仲人の口下手な口信用し

集金に行き同情して帰えり

堺市 吉田圭井堂

ありふれた人が悟りをひらいてた

み仏けに仕える身とて銭は銭

千年の艶三尊を硝子越し

山越せば亦山があり人生譜

断食

断食寮煩惱が追う他人の膳

豊中市 戸田古方

ビリでしたともいい兼ねる聞き合せ

ぬすまれたという伝説も箔をつけ

じようだんにいうたらほんとに忘れてた

「浜名湖に遊ぶ」

晴れてほしいので晴れることに決め

フィアンセの分もいつしよにお賽銭

大阪市 市場没食子

女房に上手に飼育されて老い

ボinasが目の前辞めたい気を鎮め

新年の自句を賀状の端に添え

失業保険掛損にできよう嫁ぐ

倒産を正月だけはもちこたえ

尼崎市 長谷川三司

酒の座に酔わぬ葉の馬鹿らしさ

用のない身に十二月の百貨店

先生と云わぬと返事せぬ揉み療治

石ブーム米を担いた同じ道

地下の隅猫は魔性の目をもてり

芦屋市 松下たつみ

身を守るための水引派手にする

くい残す酒で分かれた忘年会

淀みなくしやべり自分を見失い

経理部長もボinasの出た顔になり

婚約のときは甘党だった人

神戸市 仲 どんたく

賃上げへ赤旗振つてる悲しき鶉

午歳や競馬へ運をかけに行こ

小春日を猫の子一つ道よぎる

観音さん妬かはるさかい外で待ち

歯科医歯を抜きさしにして株のこと

大阪市 石倉旅風

トボトボと歩けば鐘が鳴りそうな

古風さは出雲の宮へまいらせる

旅愁わく汽車の煙の影法師

白頭を搔いて市報を読む市長

思想までおなしに見える団地の灯

加賀市 那谷光郎

苦しさは癌に希望を持たす嘘

ポチ袋母に戻った帯を解き

そう酌ぐな酌ぐなと余生の酒うまし

無心度々為替代りに父がくる
屋に来て食事はすんだ客の嘘

平田市 久家代 仕男

釣り上げた方へじわじわ竿が寄り

用便の窓から賞める山紅葉

金の無いことばかり言う晦日が来

迷うことばかり不惑の子沢山

杖の要る年で算盤まだ弾き

守口市 村田 飄太

昔なら定命五十はやはり年齢

茶碗まで灰皿となり宴おわる

記念樹は母校の屋根を越す繁り

使いようにで切れる鋏をもて余し

先生も自分の病氣は診てもらい

大阪市 宮尾 あいき

天王寺動物園 四句

象の外は眼中に無い孫の足

虎もひょうも孫ワンワンで押し通し

ペンギンに見とれて孫に放つとかれ

お昼寝のカバのお尻を見てかえり

よその嫁になりきつた娘の他人めき

奈良市 草 深 醉 升

師の声が聞こえるような今朝の雲

蹟いた石も気になる石ブーム

大声でお国訛りのままの父

初詣り掏摸も柏手打つやろか

初詣りしてから乞食位置につき

大阪市 西 出一 栄

飛行機へお守りつけて乗る弱氣

大特価白菜一円安いだけ

クラス会校歌合唱して六十路

純真へ一目惚れした妓の眼

ユーモラスに弁士筋書き外れていず

大阪市 今 西 章 雅

綴帳の下りる余韻を見ずに立ち

議員から来たのは四円の年賀状

純情にかくされていた猫の爪

げつそりと瘦せて戻った猫の恋

ベレー帽似合うか還歴近くなる

大阪市 不二田 一三 夫

熊がおじぎしていると人間が思うだけ

ボーナスは出なかつたが子犬拾つてきた

餓えた犬よ ひと晩だけなら寝て行きな

公園の落葉を肩に別れ話

胃袋め また労働歌うたいだし

防府市 長野井蛙

日溜りへくつたくのい腰をすえ
人間の古手スクラツプにもなれず
集金を犬寝そべつて寄せ付けず
破れ傘捨てた故郷の雨に濡れ

大阪市 大坂形水

十二月かけ声をして火鉢立ち
心臓の縮む車に乗り合せ
退院をするに大安の日を選び
表まで出てきて家を指してくれ

大阪府 西いわを

落葉して幹の太さが頼もしく
肥えて来た瘦せても来たと計量器
色恋やおへんお金が目当てどす
縁が無いとは調法な断りよう

下関市 桜川不水

師走風足を掠めて肩へぬけ
焼酎のゲツプが鼻へストレート
唾吐いた途端美人とすれちがい
酒も減りホルモンも減り日向ぼこ

大阪府 早川清生

登呂縹渺神より先に人が棲み

社長車に妻乗せてみる運転手
人生を女と読み替えても通じ

映画「偉大な生涯の物語」

キリストは高い所へ立ちたがり

大阪市 正本水客

後戻りしてマツチを貰う懐手
初対面ばかりの中で椅子きしむ
職安へ何不足ない顔でくる
生活のペースを変えて靴を穿く

堺市 富岡淡舟

方便の嘘に得心して帰り
歌麿の姿になつた四畳半
本妻も二号も産まず老けて行き

初孫出産

初孫は一姫でよし母子達者

高槻市 福田丁路

愛情に應えて犬の甘え顔
金策に疲れ飛び込む蛸焼屋
期待した通りに咲いてくれぬ花
焼芋屋日本一の旗識し

高知市 川竹松風

吊し柿粉がふいて来て土佐も冬
言いくい事も言切つて十二月

見え透いた嘘も聞かされ年の暮
ド忘れをする日も多い十二月

岡山県 田村 藤波

裏町にみる人生のあるがまま
信頼にこたえて犬が泥を塗り
罪だけを憎む人間にまだなれず
引揚者の未練朝鮮漬の味

大阪市 山川 阿茶

文案の「宵庚申」

筋金も根性もなく義理の前
土地ブーム鍬をクラブに握りかえ
遠慮して後通れば排気瓦斯

健保改正

薬価値下げ算術を勉強し

岡山県 本田 恵二朗

スタイルも土産の一つ初帰郷
もう世帯ゆずれと人間ドックが言い
結びつきそうもない要素を結びつけ
竹光が政宗ぶつてみたものの

大阪市 水谷 竹莊

コーヒーの湯気を見つめて想をねり
盃は好きな人へとさしたが
きらいやと云うホステスを目で叱り

抱くように愛する人の靴みがく

京都市 大鶴 喜由

山と女 触れるところで怪我をする
十七が母云いまかす夜の膳
となりに住んでからは孤高と見てとれず
フレンドの名ばかりでなしこい心

門真市 福島 鉄児

月末の皺よせがあり夜の膳
風邪引いてうるさがられる歳になり
女性讚美している肚を見透かされ
妊娠の兆へ挙式急がれる

米子市 小西 雄々

見るだけの気持で自動車ショーに来る
磨かれる石はブームの訳知らず
エンストへ気が荒くなる十二月
臨月へ女としての気を配り

笠岡市 木山 遠二

本下利玄生地足守を訪ねて
足守の土塀夢二の女居りそんな
利玄歌碑顔を温雅の山へ向け
声のみで住持出て来ず大光寺
足守の町よさらばと腹がへり

大阪市 本多柳志

子がみんな巣立つた脛が細うなり
ぜい竹へ蘂をもつかむ気ですが
だまされた土地に他人の家が建ち
剰余金流す熱海の湯につかり

布施市 久米奈良子

着替してすがしき夜の肌匂う
仲人口でなかつた筈が大分ずれ
見解の相違唇さむうなり
結論はいつも出ぬまま逢う別れ

広島県 杉原愛鳩

小金チャラチャラ養老院へ行きたがり
ドツクから出て元通り酷使され
父の籍母へ時々会いにゆき
血圧を他人が心配してくれる

竹原市 山内静水

信濃路紀行

草笛のしみる小諸の歌碑に立ち
三百余年の歴史墨絵の如し城
松原湖小石ぼつんとほつて下り
信濃路のロスを「こだま」でとりかえし

高砂市 吉原紅月

茶山花の赤へ冬陽が暖かし

石ブーム買い出しの過去想い出し

掌の平に茶碗の温かさが嬉し
こぶ茶吹き吹き枯がらしの音を聞き

大阪市 河井庸佑

就職が決まつて単位気にかかり
満三つもう始まつている入試
公衆道徳守ればまたも座られず
利口でもからすはからすだけの知恵

京都市 室井八九寸

なお生きる漱石の忌を誕生日
本山の貫禄を鳴る春の鐘
間の抜けた挿話が光る時の人

葉袋氏を悼む

逝く秋を京に追慕の香をたく

小松市 関戸宗太郎

合格の電話へ母も子もどもり
プラモデル子へ組立てさわらせず
宿題を妻へまかせてプラモデル
空果から見れば玩具のような鍵

大阪市 児島与呂志

温室の变りと満員負け惜しみ
タイミング一つ狂うた縄のれん
ヒレ酒の酔いに女の情を読み

十二月釣り堀にいる不安見る

大阪市 福井野迷路

友は死す涙まだ滴れては居なかつた

白い髯ピンと今では稀少価値

あせつてもなるようにしかと云う悟り

他人には夫婦のことはわかるまい

呉市 林野甦光

すぐそこの街が解らぬ都会の灯

郊外の朝わらぶきが萌えている

屈辱の味噛みしめて便乗し

愛着もなく人生の底を行く

奈良市 宮口笛生

目覚しに起こされて行く朝氷る

カツターの白さが男引たせ

正月の父母長生きをうれしがり

燕の巢みたいな世帯に十二月

新居浜市 小林孝正

非力なる身になお描く拡大図

單純に生きられる顔よくしやべり

逢えぬ日の帰りのバスが混んで居り

一部屋に黙つて女と居て疲れ

芦屋市 丸川初甫

墓口の音も貧そな十二月

大穴をねらう眠つきのハンチング

コップ酒だけが知つている左遷

お料理も出来ますとアイシヤドー笑い

岡山市 江国幽谷

庭の石眺め落着とりもどし

保険屋が趣味の一ツをはめて去に

シイ茸が僕だけなかつた茶碗むし

親しさの順序で書いた年賀状

京都市 松川杜的

北陸立山の旅に

空席へ指定券買った阿呆らしさ

旅立ちへ見直おす故郷の山の色

大都市へもう空の色がにぎりかけ

湯の宿の女将に生国見破られ

岡山県 大森娛句楽

企業主は詰り社員は石の趣味

勤労を感謝二合の酒で足り

生活の無駄が明治の瞳に余り

仲裁は油を注ぐ羽目になり

倉敷市 野田素身郎

月給に見合う料理が本になし

財布の紐ゆるめてほしいピラをはり

今年はちがうところから隙間風はいり

ひとり喋り楽しかつたわとぬかし

今治市 越智一水

日だまりのそこで薪割る音がする

ひと葉だけ不屈守っている枯葉

団栗を地蔵頭ではねかえし

宿直へ昼寝ではない昼寝する

ハワイ 羽佐間柳葉

学力にあらずスポーツで入学し

賛成へどうでもよい手そつと上げ

任せときなと先輩顔が言う

右顧左眄平のまんまで定年期

岡山県 浜野奇童

姉に義理たてて妹も嫁き遅れ

代筆と知らずフアンは見せ歩き

アルバムへモンペの妻が振る国旗

湯の町へガタゴトゆれるバスで着き

倉吉市 奥谷弘朗

オルガンは妻のへそくり作る音

矢飛白が似合つた昔もあつた妻

底抜けに飲みたくもなる十二月

手習を思ふ五十が来てしまひ

出雲市 原独仙

下心ない進物を貰うておき

健やかでありたい余生初詣

老妻も若くありたい髪染める

肝心なところでドラマにコマーシヤル

鳥取県 清水一保

酒はまだ有ると幹事の顔を読み

四十路にかかり一汗ふく人生

太鼓判押して仲人酒にされ

来年有るから木の葉も風に散り

大阪府 谷沢好祐

よその課へかわれば課長もう他人

家具の谷間でアパートの新世帯

行けぬもの行く学校は金が要り

姫路城

風雪に耐えた雨戸のごついこと

愛媛県 村上旭童

帰る頃咲く球根を植えてたち

来春の夢 出稼の父として

十二月今年もついにやせたまま

方言で通す気 出稼もう四十

大阪府 宮地双楽

石だたみ凍る夜空の寒まいり

埋れたる謎へ考古のピンセット

考古する篤学の士は趣味に生き

ただ一ツ真理求めて我も老い

岸和田市 植山武助

振りむかれなくとも野菊咲き続け

奥様と呼ばれ方にも馴れ旅帰る

上役に囑託と云う道があり

保険金ちよつぱり得をした不幸

守口市 羽原静歩

オーケストラ女の城に夢があり

特賞はカラーテレビで買わせる気

せきばらい一つ会議をリードする

商魂は新幹線でメモを取り

新居浜市 近藤凡生

叙歎返上小気味よい記事を読む

出来心棚のコケシに見つめられ

首浮かす湯舟で明日の策を練り

妻の愚痴封じる土産包ませる

兵庫県 河原みのる

石投げる距離を鴉は目測し

一票と認めた賀状届きけり

「たまゆら」に思ふ

ぜいたくな家出俺にもしてみたくて

さて君が代にとつてかわらん歌もなく

枚方市 宮川珠笑

納骨の順にも割り込む人があり

刈り終えた野良着を運ぶ自家用車

清貧に花を欠かさぬ妻がいる

共稼ぎ泣かず笑わぬ子に育て

兵庫県 遠山可住

飛行機にするわとあつさりしてなさり

町議への野心気付いてくれぬなり

どこやらの金があまつて石磨き

行く水の此処で一つになつた巾

兵庫県 大江秋月

孫の代になつたらと蜜柑植えておく

モーニング手をとおさぬに借りに来る

職場の横綱それは酒のこと

ポーナスは家へ運んだだけのこと

大阪市 中川滋雀

堺大病院にて急死

とりすがる親の嗚咽が胸を刺し

たんたんと主治医は死へのカルテ読む

主逝つた病室菊は真盛り

ツタンカーメン生理無視した列につき

西宮市 野田野菜

聲選びハンサムでない方母すすめ

凶悪犯世間に詫びると手記を書き

手拭いと扇子余興の下心

捨て場所のきまつていないガムのカス

布施市 渋谷 三 時

考えの纏らぬまま夢に入り

清貧は迫る年の瀬空つ風

世に拗ねた清貧くれを悟り切り

首伸ばし焦る政府の融資待ち

京都府 西村 句 楽 坊

行脚した寧らいにねてお念仏

俗気ある心へ仏語吹き通る

塵界の世論に押され帰る寺

誇りないままに又々年をこえ

今治市 小笠 原 青 女

高血圧にて闘病中

生きるのも大変ですと食養生

生きるのをふつと忘れる日が続き

僕の為生きておくれと子の瞳

人生の峠ここでひとやすみ

美禰市 安平 次 弘 道

床柱になれて汚職の噂が出

もう一人の僕がのぞいた酒に負け

千鳥足月にはらはら見守られ

非行よりまし教育ママのあきらめ

出雲市 中川 晃 男

呉服屋の仲人衣装も売りつける

夜警明けあくびで無事に引きつがれ

ポーナスの魚が匂う猫の鼻

ポーナスは受取る迄を夢にする

伊丹市 小川 静 観 堂

俺の勲章もいまの勲章もおなじ形

国会はどうともあれと忘年会

保険証があるから注射に精を出し

ええ加減に引き下がろうか七十七

芦屋市 唐 崎 専 翁

自画像四句

診察のカルテ案外血の若さ

濁音は頭だけあと異状なし

痴か智かと平脈らしく打ち続け

青年のまま年輪の皺を寄せ

新居浜市 安 藤 桂 仙

ウインドを覗く淋しい懐ろ手

近道を神がこぼむか柵が出来

リーダーが欲しい家庭の空模様

故郷の言葉で話す友が来る

石川県 大山雅城

仲の良いことも咬み合う犬なれば

初対面聞いた名前をもう忘れ

泥棒もせずに飢え死したとき

悶着の因は帰った客にあり

初対面名刺忘れたことを詫び

初対面胸病む女と思われず

いまわしき記念の日には香を炊き

加賀市 野村味平

下関市 原千里

空地また家建つ杭を打ち始め

仲人がメモをまさぐる御挨拶

妻ばかりタンパク質を独占し

今日も又死亡広告癌とあり

スモッグ予報延着見こし朝寝をし

百点の答案父を待ちかまえ

大阪市 田中十方

出雲市 尼緑之助

日の丸はどこにあるかと初明り

元旦の意欲鏡にも対し

又一人生れた孫へ妻は発ち

途中下車しそんな顔の前に立ち

ナガラ族編んで喋つて見て甜めて

雨にも負けず風にも敗けずコスモス起上り

西宮市 若林草右

鳥取市 河村日満

釧路にて二句

札幌で震い釧路を温たがり

大阪のような通りもある釧路

夕日落ちんとす天 地人みな美しく

元旦の柏手五十を過ぎた音

ほうかむり百姓の顔が出てしまい

冷静に戻る早さのつばにふれ

大阪市 室谷鉄舟

送り出し女大胆に股火する

大役を果した案山子畦で寝る

誰か知ら焼芋匂うパスの中

奈良県 西辻竹青

すまないがしよせんは見込みない女

不甲斐なさだまされてると知り乍ら

日曜も早出居残り十二月

長男結婚す

喜びの門出に不況の風きびし

堺市 田中狂二

嫁に

ゴールデン此処は墓場のある所

還歴を迎えて

還歴の涙もろさへ子等祝辞

富田林市 浅川八郎

人災をかくいなし一家無事

食事の合理化業を服む如く

物事にこだわらぬ性で生気なく

笠岡市 出原真奇

馬小舎をのぞけば小型乗用車

我が夢をかなえてやつた娘の荷

母は馬息子の嫁はカーで来る

広島県 和泉松風

三次市にて

江川も冬を運んで沈んでい

降る雪は山々近く迫つて来

早耳はもうそこまでを知つていて

松江市 柳楽鶴丸

若社長昔は赤旗ふつた人

大切にします夫はスポンサー

標札へ二人仲よく新世帯

富田林市 吉岡美房

宴会の音痴今だに軍歌だけ

住みにくい娑婆へ心中呼びもどし

金星がまぐれまぐれという笑顔

岡山県 池田古心

貧農と歎くな田を持ち家を持ち

金に縁薄く布団の綿堅し

豹変は鬼女なりうつちやり喰いし恋

大阪府 天正千梢

赤松の被害松茸にも及び

孫の顔見せて快諾さす魂胆

スト学生帰れば経も読む暮らし

愛知県 原峻一郎

生きている証拠は蚤が俺を食う

酔うて来て夜なべの糸を買わされる

子の図画は家より大きいお母あさん

富田林市 岩田美代

能面のように感情ぬり込める

うつぶんを箒に託して掃きまくり

感傷がわくひまもなし落葉やく

高知県 奴田原紅雨

税務署と喧嘩しているうちが花

屋台酒ついにピエロの鼻となる

三面鏡なんでもなかつた顔にする

山形県 岡 清泉

鳥取県 渡 辺 乱 坊

酒が言う不平ウンウン聞き流し
敷かれてるらしい夫婦と乗り合せ

明治の眼矢張り蛇の目の日本髪

玉野市 小 谷 仙 山

掃除するハミング「愛しちやつたのよ」
おせつかい焼いてピンチに立たされる

大阪府 福 井 多 蘭 子

正月は山でと親の気も知らず
五十年ぼんやり暮した訳でなし
満月がいびつに見えて千鳥足

岡山県 横 山 一 声

土地売つて寺近代的に相を変え
税金を喰う役人も税がふえ

大阪府 賀 本 昇

お通夜で墓地をかうとく話が出

岡山県 横 山 一 声

中古車がまた故障した十二月

里がえり下着以外はみな借り着
取次ぎに出たのが社長とは知らず

八尾市 宇 佐 見 彰 大

もう十日あればと思う十二月

浮世絵も歌麿だけが知られすぎ
アルサロへ遊覧バスで三百円

布施市 森 下 愛 論

—— 自 選 ——

風邪引きへ僕は矢張り玉子酒
二次会を断わり玩具を一つ買い

高槻市 山 田 季 賛

万国博の敷地冬眠の蛇は知らず

清 水 白 柳

伊東・下田にて

歩くかせて商魂見せる観光地
観光地道路工事を見て戻り

関係はないが見上げる塔の尖
情痴の果ての窓の灯を洩らすまじ
ひとつぶの涙とうとし ものを言わず
隣家とのいさかに茨など植えんか

小松市 馬 場 魚 山

川 村 好 郎

用のない足駄大正も遠くなり
それ程でない旧跡へバスの列

物慾一代墓も枯葉が積もるのみ
シャツは買い洩りチツプは気前よく

希望通り別居はさせてこせついで
金づまりの顔せず専務出たっ切り
チツプ置きあつさり帰る手も使い

文案を見る

人間国宝へ大統領ノと呼び屋
地下街に支店 本店見直され
週日は模造の方のネットレス
大学出とだけ 大学の名は云わず
姓名学 庶民は論語読めませず

北川春巢

西尾栗

日本間の明るさにして梅もどき
麻雀組花札組という賑やかさ
五人目の孫抱く力余りけり
古川柳の通りに指図風邪の妻
アバンチュール横町をぬけ路次をぬけ

若本多久志

三度目の見合い この辺で決めておき
ホームバーそろそろはなにつきはじめ
宮内省御用が残る大東京
自然の猛威とかで又不通なり
コレクションに罪あり料理屋の箸枕

菊沢小松園

サービス過剰家庭争議のもとになり
新年の抱負は天馬空を行く
心ためすつもりの財布預けられ
恋しさは超特急ももどかしい
配当にかかわりもなく馬走る

中島生々庵

元旦だまさか借り着でもなさそうな
元旦を馬鹿の見本の様に酔い
梯子酒 放し飼いの犬に似て
ご冗談でしょうといいつつひよんな事になり
陽当り探す俺に似たビツコ犬

松江梅里

お年玉予算に入れた顔が来ず
餅のない正月もした子がはたち
欲言えば自慢しなけりやなお光り
出さぬから這入らぬ道を教えられ
素人可 衣裳貸します優遇す

寒中お見舞い申しあげます

川柳塔社

秀句鑑賞

— 前月号から —

後藤梅志

雄鹿にも似てハードルを飛ぶ若さ

(無鬼)

雄鹿というものは、肢体のなやかな、跳ぶことにかけては動物のなかでもすぐれている。

野生動物の王国。ケニヤの奥地などで、獅子に逐われて、二、三十頭集団を成して疾走してゆく、雄鹿の群れをよくテレビで見かけるが、あっと息きをとむような見事さだ。この点日本の鹿を見馴れているわれわれは、鹿という動物がおとなしい処女のようにも思えるが、いざというときの動作は実に敏捷な動物だ。

それをこの句は、ハードル競技の選手に例えているが、そのものびしりである。思いつくのは、去年の東京オリンピック女子ハードルで、惜しくも四位になった依田郁子選手と、それを上回る外国選手の一団である。アツというまに、ハードルを跳びこえ、

跳びこえ決勝!!に殺到したが、あの跳躍と若さは、どこからくるのかと思っていた。まさに生命の不思議というほかはない。

ノド自慢パンチがあるのイカスのと

(代仕男)

うまいものだ!!この頃「あなたが選ぶのだ自慢」というのがNHKにあるが、三人の審査員のほかに、聴取者のなかから二十名あまり、素人の審査員が登場する。そしていちいち感想を述べるのだが、いうことが率直でおもしろい。

なかには「パンチ」があつてよいとか「イカス」というような言葉がとびだすのだ。審査員が顔まけするような活潑なものもある。テレビをみる吾々聴取者は、その評言の新鮮さを感じ、また世のうつり変りというようなものを感じる。

日本人は、新造語の天才である。パンチというの、拳闘用語から転化して、この頃は

何にでも使われる。流行歌などには専門語としてびったりしているようだ。殊にパンチのきく歌で売り出した歌手がチェミ、弘田三枝子など多いところから、パンチ、パンチということになる。「イカス」という言葉も若人には新鮮さを感じるのだろう。まさに、現代はわこうどの天下となった。

誤植だらけのような人と添い

(嘉子)

この句は、内容的にたいへん面白い句だ。しかし、もしこれが本当のことであつたら、余りにも痛烈すぎると感じた。案外、じつは温和なご主人であるかも知れないのだが。そんなことはべつとして、世の中には、誤植だらけのようなご主人があんがい多いのではないだろうか。

ご主人は気がつかず、奥さんの方がそう見ているというのがこの句の味噌である。実際に、雑誌を手にとって、あまりにも誤植が多いときは「しょうがないやつだ」とつぶやきたくなるが、但し、それは読者の感じであつて、実際は、校正がわるかつたか、印刷屋が行き届かなかつたか、分らないものだ。しかし誤植はいやなものだ。この感じがその儘あてはまる人物というものは、吞み助で、うそつきで、甲斐性なし、ということになるが、そんなひとは、たまにしか居ないであらう。

流人島矮い墓みな海を向く

(清生)

江戸時代の遠る人島は三宅島ということになる。江戸時代は専制ではあったが、いままのよう証拠がなければ、野放しにしておくのとは違つて、悪いことをしているやつには、遠島という刑罰があった。もとより死罪よりは軽いために、種々の恩恵があつて、大赦などで赦免されるものもあるし、親類、縁者のとりなしで島がえりになるものもあつて、必ずしも島で一生を果てるというものばかりでもなかった。

さりながら、運、不運もあり、横着なやつもあつて、島の土地から離れることなく、あわれにも土地の人の手を借りて、墓石の下へ這入ってしまうものもあつた。島民はこれを憐れんで一カ所へあつめ、矮い(ひくい)墓を建ててやるが、その墓はみな海の方へ向いている。この句のとおりである。

年に、一度か二度くる便船を待つていた、江戸からの便りを、死後にまで待ちつづけるかのように!!あわれにも、矮小なる墓石のすがたなのである。

これがいやだから、島脱けをする太いやつが出来るが、大抵はつかまる。どうも江戸時代のほうが、人情味があつてよかったようだ。この句は、流人島が如何様のものであるかを物語つて貴重な作品である。

忙がしいやないかと税務署賞めてくれ

(静馬)

税務署が来ると、お茶も飲まないのが普通だが、たまたま賞めてくれることといえ、こんなことである。また不思議とそんなときには来客がある。注文の電話がかかったりする。そのたびにひやひやするのだが、大抵二人がかりで、洗らいざらえ調べてゆき、小面憎くなるが、なかなか彼れらのカンは返えていて、要領のいい線を崩さない。この句は、泣き言をいって、ハラハラしている被課税者が目に見えるよう、軽い笑いがある。皮肉をいうのは吏員で、この句に皮肉はない。

もう五分待つて見る気のコンバクト

(朱扇)

じりじりしている、女の動作と、心理が読めて、ほほえましくなる。この女性は、もう大分永く待つているようだ。

デートで、女を待たせるのは、エチケットに反するが、女をじりじりさせるのは、男の特権と考えている男性もある。しかしこれが必ずしも、横暴な男性のみでないことは幸である。何にしても、男は、女をあまり待たせないことである。

にわか雨こめんなさいと虹が立ち

(峰子)

この句は「俄か雨」がいいか「夕立ち」の方がいいか、少し考えさせられた。という

雑詠

大阪市 橋本 緑雨

兼六公園(二句)

雪景もまじか公園の入手をし
寄観亭知人を探すここに立ち

苦楽山莊(二句)

山莊の陽当りで一日暮す也
山莊の土地買えないのに値ぶみをし

今治市 長野 文庫

長生きの秘訣それぞれ皆違ひ
ふり向きも休みもせずにく月日
逃げ場もう僅か追い詰められて来た
家出した訳 田舎には稀な声

和歌山市 秋月 宏方

倒産も知らずほそぼそ続く店
七五三あとに月賦の尾をひき
しあわせの一つ補聴器まだいらす

宮島へ渡る

遊覧船浦島さんに出逢いそう

厳島神社にて

神さまもまだおやすみか朝ぼらけ

のは、この頃は「俄か雪」というようなものがあって、「俄か雨」では虹が立つことがあるかという疑問もわいたが、原句のほうが、自然であると考えた。

「こめんなさいと虹が立ち」は、女性ならではの見つけどころ。この句はこれだけで充分だ。こういう素材で、知恵のある句が、これからどんどん出るようにしたい。

引揚者の未練朝鮮漬の味

(藤波)

朝鮮から引揚げた人は、大へんな苦勞をし

ている。それは、満州でも、朝鮮でもかわりはないが。あの引揚げ時の混乱と言語に絶した窮迫とは、まったくの命掛けであった。思い出は尽きないのであるが、そうしたい思いを語るとき、いつも話に出るのは「朝鮮漬け」のことだ。それほど、朝鮮漬けはなつかしいのである。

あのへんな匂いのする、そして唐芥子で舌を刺す白さい漬けが、どうしてこう恋しいのか、不思議である。朝鮮の人が、自慢しただけのことであると、いまでも思い出すのである。

生駒から鰻谷へ

——中島生々庵先生

その後ご無沙汰申しあげております。

一三夫さんからのお便りで「川柳塔」のこと

ことも聞かせていただいています。

私はまだひとりあるきに自信はござい

ません。上町線で万代の家から阿倍野橋

まで出るのが関の山です。

ばちばち生駒の町はずれをあるく稽古

麻生菫乃

をしています。「川柳塔」へは毎月句だ

けでも発表させていただきます。

壁落ちた路地を推理小説めく散歩

だらだら坂 朱塗りの橋も街の味

暮の助言 黒は迷路を増すばかり

虫の声寝酒は少しずつまわり

(緑之助)

この頃のような煩瑣な時代に「寝酒」がのめるということは、先ず以て羨ましい。

私などは、寝きわに吞むこの寝酒がのめるのが、人生無上の幸福と考えているが、いまもってこれを成就していない。しかし経験はある。だからこの句に引かれるのだが、磊落で苦勞人と想像される作者の、これは酔中吟と見てよからう。句がすらすらとして、少しの渋滞もない。

親類にまで小器用を当てにされ

(文秋)

この句にひかれるのは、問題が小器用にあるのではなくして、作者が小器用ということばを用いたことにあるのである。小器用とは、作者が卑下して云ったのだが、それでその人柄が出ていると思われる。

小器用とは、よく間に合う人のことである。きれいい好きでもある。正直そうでもある。はたらき者でもある。とこう数えあげてみれば、小器用こそは一種の文化人であろう。作者は卑下しているが、句にはほのかに愛すべき人物が出ている。一種の典型的日本人なのである。

世に「器用貧乏」という言ばがあり、よくもとれば、わるくもとれる言ばである。その辺がこの句の良さであろう。

二つの溝になやむ

麻 生 葭 乃

「英訳川柳の灯は消えず」と題して川柳を英訳していられる佐保蘭様の御熱心には頭が下ります。私などは大いにお手本にせねばならないのですが、消極的な、ひっ込み思案の私には、どうしても川柳の翻訳に手が出せなかったのです。

国民性も、風俗も、習慣も違う異国の人にこちらの人の考えや、気分を寸分たがわずに伝えることが出来るでしょうか、これが私を躊躇させる第一の溝でした。内容の表現にしても、こちら式であってはいけない。向うにはちゃんと先祖からいいならわされている言葉のあやというものがあるのです。それに精通していなければ、すっかり気分が毀れて終います。あちらの人に川柳の内容をわかって貰うだけでもゆきあたる事が多いのです。

今仮りに松の内を詠んだ句があるとしたしましょう。松の内といえ、私ども明治の間はまず門松や、追羽根、屠蘇機嫌の回礼者

の外に、人通りの少ない街の風景を想像します。そして其街が次第に平常の姿にもどってゆくうちに、とり行われる様々の行事を思い出します。此松の内という僅かな五音字が、すでに数行の内容を物語っているのです。あちらには松の内という便利な言葉がありませんから、正月の初め頃とか、一月十五日までとかいわねばなりません。それでは新しい年という感じしか伝えられません。松の内というたった五音字の熟字でさえ、明瞭簡単な適訳が出来ないではありませんか、それよりも、もっと、もっと私の困ることは耳から耳へ伝えられる韻律の翻訳です。これが私を阻む第二の溝であります。

日本文でも英文でも文学的なものは、新聞記事や、化学書よりずっとなだらかな調子で書かれていきますから、心よりリズムを感じながら読む事が出来ます。まして詩と銘をうつからには韻律を尊びます。調子よろしからざ

るものは詩にあらずといいたいです。英詩の調子のよしあしは、アクセントの配列によってきまりますが、種類によって長篇物語に適するものや、戯曲に適するものや、四行詩の如きものと色々あるのですが、英語は私のネーティヴ・ランゲージではありませんから、どうしても眼から這入る事が多く、耳なれていない為、英詩をスキャンする力に欠けています。何処にアクセントがあるのか、ストレスのありかに戸迷うことがあります。これでは英訳どころの騒ぎではありません。兎に角やさしい英詩を作るのが一番の近道だと考えたのですが、身近かに文学的指導者の外人があるわけなし、セルフトゥットによるよい仕方がないと思ひながら、作詩法の良書をあさる暇もなく、川柳雑誌の雑務で多忙な毎日を送りて来ました。不幸にして廢刊後病に倒れ、只今静養中ですが、もう体力に自信がなくなりました。余命いくばくもない私に、完成の日のあままりにも遠きことを思いまして、いさぎよく川柳の英訳を断念いたしました。めくら蛇におじぬ勇氣を出して、病床でならべて見た二三をお目に掛けてこれを最後といたします。

うそ、うそ、うそ木魚の音もそうひびく (霞乃)

'Tis alie; 'Tis a lie;

Sounds the wooden gong of temple so

初日キラキラ網は殺生忘れてる (霞乃)

The sun shines upon the shore

In the first morning of the year.

The net forgets to kill fish now.

菜の花はあの屋根のはて屋根のはて (霞乃)

Beyond the roofs extending far

There's a vast rape field.

Those yellow flowers I'm longing for

飲んで欲し、やめてもほしい酒を酌ぎ (霞乃)

Pouring your cup with pleasure

Still, I hope you may give up drink.

人と鰯、鰯は油したたれり (作者名失念)

Human and sardine yet

From the sardine drips the oil

Translated by Yoshino



のむだけで…痔がしぼむ！



●新しい痔の内服薬

サ-カネツテン

★本剤の説明書御希望の方は下記へ



日本新薬株式会社

京都市南区西大路八条

北 米 の 英 訳 川 柳

阿 部 佐 保 蘭

折も折佐藤君から北米の崎村白津氏の知人大恵孤舟氏の英訳川柳を送って来られた（これは崎村氏が大島清明氏の手を通じ佐藤君宛書送られたもの）白津氏がその知人の英訳に対する心構えを述べて居られるので紹介すると「最近の英訳川柳をお送りします。すべての翻訳につきまとう第一の問題は異った伝統習慣や表現をどう取扱うかでありましょう。直訳によって日本式を押し通しますと、習慣の相異が赤裸々に表われ、非常に面白い場合もありますが、時には訳の分らぬものになってしまうし、逆に意識によってすべて欧米式の表現にしていまえば、すぐ分ってもらえる反面、その理解は日本のエッセンスから程遠いことになります。殊に対象が川柳という強い主観によって精撰された言語で構成される短詩に於ては直訳も意訳も共に小説や日常会話以上に可成りの危険が伴うことになりましょう。以上は目下熱心に英訳しております知人の考えです」これを見ても分るように、いかに川柳英訳が至難のものであるかということが理解されることと存じます。川柳翻訳研究会では今迄英語では日本一と目される英訳者をお願いして来たのであるが、それでも仲々完全無欠とはいかなかった。この至難の業をほぼ時を同じくして日米両国間の柳人とその知人との間で熱心に英訳にとりかかり、難攻不落の霊峰の頂上を極めんとしておられることは、誠に不屈の登山者魂を思わしめるもので、その成功を祈って止まぬものである。ここにその英訳の一部をピックアップさせて載き、大方の好意ある御批判を賜わらば訳者も筆者も幸甚に存ずる次第である。

過ぎて行く日々を無言に鏡見せ

Mirror marks No phone,
But shows of Days Gone.

青空の心になつてやり直し

With the mind of Blue Hasven,
Restarting Js Enliven.

さげすんだ金に本心見破られ

The money once J disdained,
Discovered my naked mind.

労働は神聖にして靴の泥

Labor is, after all holl,
Even my shoes get muddy.

追求の果てが自然の二字に尽き

When persuances of libf mature,
There's just one word 'Nature'.

盆栽に犯す曲りを神許し

To bend is to shape good,
A Bonsai thus nears to God.

ボーリング離れた球へ掌を合せ

I made a gassho pray,
To the 7-10 pin play.

害虫は何故殺さるか知らず死に

A pest insects dead,
Without knowing the deed.

入口も出口も迷う高速路

The exit or the entrance,
Freeway is apt to seduce.

愛すれば愛にこたえて花の色

I love to Green-thumb flower,
With vivid color is the answer.

この一連の英訳川柳に見られるリズムは訳者の凡ならざることを示している。唯盆栽とか合掌には説明が必要である。これ等の句は北米柳人の句と思われる。従ってこの英訳川柳は彼地の米人にもよく理解されると思われるが、詩の英訳として果して完全無欠であろうか。権威ある英文学者の批判を得たいものである。尚欲をいえばかかる身近の川柳の英訳も結構であるが、一歩進んで一般に所謂名句といわれるものを選んで英訳の途に進まれる時その英訳は一層輝きを増すことと信じます。

(訂正)・12月号20ページ3行目佐前晃嗣は佐藤晃嗣に、
20ページおわりから2行目 Slowly, は Slowly・に
21ページ8行目 eherry は cherry に、
21ページ13行目、price. は price, に。)

北京好日

—大陸放浪—

東野大八

中国のお正月は、紅い春聯や、きらびやかな門神の色からやってくる。

満洲各地で正月も数多く経験したことがやはり北京の正月が中国では真打ちの貫録があった。

春聯とは家の門、または部屋の入口の左右の柱に貼る赤い紙で、縁起のいい文字のかけ合いですべてがつづられている。

詩書継世（詩書世を継ぎ）

忠厚伝家（忠厚く家に伝う）

花開富貴（花は富貴を開き）

竹報平安（竹は平安を報ず）

こういう儒教風なのが庶民筋ではほとんどで、こういうものはむかしの日本の正月向きの引きれなみで印刷したのかどこでも売っていた。しかし、シニセや旧家などでは老家長

の学と筆先にモノをいわせたものが飾られた。なかには句会みたいに集ってはコンクールをやる。商家では

発福生財（福を發し財を生じ）

大吉大利（大吉大儲け）

書店は

藏古今學術（古今の學術を藏し）

蘊天地精華（天地の精華をおさむ）

筆屋には

善掃千軍陣（よく千軍の陣を掃い）
能生五夜光（よく五夜の光を生ず）

といった調子である。それは冠婚葬祭用の寿聯、喜聯、輓聯などということなり、一年中貼っておくのが習慣のようだ。

この春聯の故事は調べてもハッキリし

た記録がない。しかし、エピソードはある。明の太祖が微行で街を歩いたら、商家の一つに春聯を貼らないのがあったので家来に調べさせると、商売不振で倒産しかけている一と

の話に、気の毒だと帝は、自ら筆をとって、「雙手劈開死路一刀割斷是非根」との對詞を書いた。悪しきをはらい、いいことがくるようにという意だ。この對詞はとにかく帝の直筆というのが評判になり、門前市をなし忽ち家業はもち直したという。また別の本では、この帝の直筆を門口に貼るのは勿体ないと奥へ藏って押んでいたら、その志はつねより殊勝ときく、よって帝から金三十兩を下しおかれた。おかげで家連立ち直り五百年の繁昌をつづけたという。水戸黄門中国版だ。

門神は関羽と鍾馗が多い。関羽は三国志の英雄で文武拔群、誠忠無比、関帝廟にも祀られた人だ。鍾馗は虫除けしようのうの商標にもなっている伝説上の人物。むかし世の中の惡鬼共が全国大会をやっているところへ鍾馗將軍が現れ、コオロギ畑のニワトリのように鬼共をぶき残らずバクバクと食ってしまった。こうした実績などによる。

北京城の隅に有名な天壇があるが、この近くは古来から刑場で、流れものや土着の連中が天橋という広大な一面を作っていた。ここは北京市のどん底で、浅草と昔の千住あたりをいっしょくたにしたようなところ。昼間は三文手品、安講釈師、輕業、大力などが露天の下に場所を張り面白おかしく客をあつめて

いて、あたりには一パイ飲みや、めし屋、三文芝居小屋、茶館があり一日大した金がなくとも気楽に遊んでいたところだ。北京の浅草とも日本人はよんでいたが、ここはまたフランス映画の「望郷」のカスバの街頭逃げの無法地帯で、無頼、凶悪人も一度ここへ逃げ込むとベベルモコ同様、決して捕まることがない。

この名物は、大晦日に立つ闇市だ。鼻をつままれてもわからない鳥羽玉の闇の中で市が立つのだ。みんな手ざわりで、なでる、さすの取引きで、五十銭だ、よし一円だ、買った、売ったという調子。一円出して口つかの味噌つばを買ったり、売った方も一円札と思ったら古扇の皮だったりで、そうかと思うとたった十銭でガラス玉承知で買った奴が本ヒスイの原石だったり、あてすっぽうも興味万コだった。時には

「これどう、ホ……」

「よし買った一円」

さわったところは女の服で、その柔さで値がついた。女さえ売りに出たのである。

この天橋では、一世の嬌女で風ビした賽金花がいる。駐独大使の花嫁をふり出しに義和団の乱ではドイツ公使ケツトレルの妾となり、終って前門街の妓館の女将、だが最後は天橋の人も住めないようなあばらやで、近所の洗濯婆さん一人に見守られて死んでいった波乱のヒロインである。ドイツ語で、一等最初の亭主の名を呼びつづけながら死んでいっ

た。

また、終戦直後は、王古人敏がここで処刑されている。日本軍政下の華北政務委員会委員長で、大した羽振りの多々大人だったが、戦いすむや忽ち頭等奸漢である。黒メガネをかけ、一度東華門大街でテロに襲われたことがあり、これを私は取材したいところある相手だ。一名彼は没法子先生といい、日本軍将領からの無理難題が天下るたびに初手は激しく抵抗を試みるがやがて「没法子」の一言で屈伏していったからである。死に臨んで彼は、最後にもこういったという。「俄的没法子」(おれやあ、仕様がねえ)

さて、春聯の話から大いにとび出したが、私はここで座談会をやった。五、六人集めるつもりが三十人も押しかけ、食った飲んだりして社費二十円も使ったことだが、以来私はこの顔役みたいになった。リーベンタイジン(日本のエライさま)と彼等はもち上げ、いついっても下へもおかない。ここでの最後の正月は、春聯書きであった。南京大力という見物もの。相撲で海坊主みたいな奴の家で、安酒をこの油いためをおかずに、カンペイ(乾杯)カンペイとやっているうちに仲間はいつか十余人、その中の一人がいきなり紅い紙をもち出したのはじまりで、私はそこに対詞の名筆を揮わされたのである。酔った私は、山川草木だの、鞭声肅々だのを片っ端から書いた。文盲の連中がほとんどなので、意味も何もわからず大いに喜んだが、

山川より鞭声の方が字面がチミツで壮重なため、この方が大いにウケた。

天橋の貧民窟には春聯などという気のきいたものはほとんどない。私はその達筆をふったのをしおに、再び天橋を訪れることはなかったのである。しかし、兵隊となって各地をさまよううち、正月ごとに街で赤い春聯を眺めて、私の酔余の戯作、乃木將軍や上杉謙信を得々と問頭にかざった愛すべき彼等の姿を思い起してひとり微笑した。あの南京大力のアバタ面や、インチキ易者のエビスひげ、ホイホイ教のチビのスー屋などの顔、顔、顔、戦争さえなかったら今もこの連中と相も変らず友達でいられたのに……。



川傍柳 初篇研究

(三十二)

前田喜代人 川端柳風
岡崎重義 高須啞三味
清博美丸 十府
藤井和雄 岡田甫

388 其日から禿の禿名をかへる 嵐 弓

清「其日」というのは、十代目高尾のもとに、播州姫路十五万石の城主、禿原式部大輔政岑が、初会で登楼した日を指すので、高尾にしてみれば、相手が城主大名であつて、禿原侯とわかつてゐるのに、自分の禿の禿を「コレ禿や禿」と、気軽に呼び捨てにしたのでは、如何にも不都合である。

川端||贊。「禿、名を変える」だから、禿という禿がいたら、名前を変えたであらう、という軽い意味である。

高須||礎橋ブラス川端説で、如何にも古川柳らしい、軽い推量句で、もし三浦屋に禿という禿がいたら、直ちに改名したろう、というだけの句である。

但し、この「禿原高尾」として名高い、

吉原京町三浦屋の抱え遊女高尾は、原武太夫の「高尾考」では六代目とし、川柳の方では、単に二代目としてゐる。(大曲説) 丸||贊。

岡田||同。軽いウガチと共に「禿」で禿原侯を暗示した、古川柳作者の常套的手法。

389 大当りうしろにも目が五六百 五 鳥

清||不明。芝居の大あたりを詠んだ句、と思うが、「うしろの目」が、わからぬ。

藤井||昔の芝居では、大入満員の時は、所謂「羅漢台」という大衆席に、客を詰めた。五百人というのは、五百羅漢の見立て、羅漢台を暗示したものである。これは、舞台の下手(西側)の一番舞台に近い

所で、一段高くなつてゐるので、他の席からみると、羅漢さんが並んでゐるように見えるので、その名があり、幕がしまると、その中に入つてしまふ、至極安直な場所であつた。(市橋鐸氏説)

五百人芸の背中を見てかえり (タル一三)
大当たり野郎尊者をおんならべ (タル一三)

五百人向う棧敷を笑うなり (安六智五)

従つて、清説の「芝居の大あたり」が正解というわけ。「うしろの目」とは、羅漢台の客は、役者の背中ばかり見てゐるのだから。

高須||藤井氏引用の市橋説につく。

近すぎて穴が知れると五百言い

(タル二三)

近すぎて冷々おもうほめ言葉

(貌追)

大あたりうしろ目高くほめられる

(傍二)

大あたりうしろにも目が二三百

(筈四)

など類句非常に多しと、柳雨、三面子両氏も書いていられる。

丸〓賛。

岡田〓同。

390 七ナ所ばるをふくんで礼に行

菅江

清〓初鉄漿の礼を詠んだ句で「七ナ所」とは、鉄漿を貰った家の数。初鉄漿は、七軒から貰って、つけるのが習わしとなっている。「はるをふくんで」は、恥ずかしいために口を閉じて、物をいわないことに言い掛けたもの。類句は非常に多い。

笑われて来やしようとするかねの礼

(タル五)

七軒が同じ祝儀の言葉なり

(タル七)

数をよくなぶられて来るかねの礼

(タル一二)

かんじんの礼を言わずに逃げて行き

(タル二三)

七とこに金主の出来るはずかしさ

(玉柳)

藤井〓「枚をふくむ」夜討の時に、声を

たてないようにするために、馬や軍兵の口

に横にふくませて、紐で首に結びつけた。

箸状のもの「口木」を言う。(広辞苑)

初めてつけた鉄漿の、口もとを見られる

恥ずかしさに、黙して笑いをこらえた嫁の

初々しさを「枚をふくんで」と大仰に形容

した句である。

川端〓賛。恥ずかしさに、口に手の甲を

当てたさまを、かく形容したのであろう。

高須〓嫁の礼に「バイをフクム」などとい

う軍用語を、物々しく用いたところに、

面白味を出そうとしただけのものである。

丸〓賛。枚については、漢書高帝紀に

「章邯夜衛枚、撃三項梁定陶」

とあるのが知られている。当時の講釈など

で聞いて、民間に広まった言葉である。

岡田〓当時大道でやっていた、いわゆる

「太平記読み」「太閤記読み」などの軍談

で、おなじみの言葉。

391 菅笠で目高取ったが仕方なし

清〓旅のつれづれに、小川の岸にたつて

「菅笠で目高をすくったが」別にどうしよ

うというわけではない。すくってみてから

「こんなつまらぬことをして」という気持

になった、そんな句である。

高須〓「旅のつれづれ」とまでいう必要

なく、大人でも何かそんな童心になること

がある。それが「仕方なし」となって、何

か「むなししい気持」になる。写実的佳句。

前田〓「取ったが」の「たが」がよい。

丸〓賛。

岡田〓澄んだ小川の中に、あんまり目高

が沢山いるので、思わず菅笠で取るには取

ってみたが、さて入れ物もない、子供にや

りたくても、近くに子供もいない、という

旅の途次の句。そう解して、初めて面白さ

が出て来る。

本誌の投句には

なるべくご利用ください

川柳雑誌
特製

柳

箋

一冊(五十枚) 三十円
送料 二十円

実弟・松江梅里

川村好郎

試作品として長男に生れ

好郎

松江梅里は私と同じ工場で、第三番目に出来た工場長の念入りの製品である。

試作品の長男が体が弱かったので、試作品同様瘦せ型ではあるが、頑丈な体についた。梅里が風邪を引いたことも聞かぬ。それこそ筋金が体に入っている程達者である。

私は父の音痴と無器用を継いだ。父はよく素人浄瑠璃をやっているのを知っているが漬物が腐る程の声であった。母は歌、日本舞踊と芸達者であって美声であった。梅里はその母の美点を完全に受けた。試作品は消極的な小心者にうっかり製造したので、第三番目はこれではならじと、積極的な何事もどこまでもやり抜く商才に秀いで器用な梅里を作り上げた。彼はその工場長の丹誠に報い、今日の地位を得たのである。

このように工場長は研究に研究を重ねて優秀品を作ったが、やはり工場が一緒であるから、手落ちがあった。梅里も私もあわてものであり、せっかちである。

——早口のくせも子供の頃のまま

梅里

得にもならぬことに懸命になって、人の世話をしたり、

それで結構満足している。

——ありがたいありがたいとただの仕事

ばかりして

好郎

先代の工場長即ち祖父は狂句や冠付けが上手で百笑という雅号で仕事もうわの空で凝っていたが、その筋が私たちに残っているのか川柳の道にうつつを抜かしている。しかも句風も決して詩情豊かでなく、俗な女性に關した句が多いこともよく以てている。

——しほるだけしほり手に手をとつて逃げ

梅里

——横どりをしたつもりヒモがついていた

梅里

——意地つ張り好きと言えないまま別れ

梅里

「命まで賭けた女でこれかいな」は有名である。

工場長は信仰心が厚かった。これはしっかり我々に仕込んでおいてくれた。梅里も私も同じ金光教の教えを生活の基調とし、生かされていることをありがたく思っている。昭和四十一年は母の四十年祭を仕える年である。試作品も優秀品も共に世にも捨てられず、何とか使ってもらっている事を工場長に感謝したいと思っている。

実兄・川村好郎

松江梅里

「試作品として長男に生れ」これは兄好郎の句である。

わしは試作品だからどうせ未完成な人間である。むかしから総領の基六と言う古諺もあることだし、とは常に言い聞かされている兄独特のひねくれであるので、私は敢えて逆らおうとはしない。

つらつらおもひみるに私等五人の兄妹のうちで、兄好郎を残して四人の弟妹はそれぞれ里子にやられてしまった。父は極端な子供嫌いであつたらしい。しかし造ることは極めて好きであつたことには間違いない。これを思うとき兄は試作品どころか感激と涙と努力と丹精に依つて生まれたいの結晶である。

深窓に生れ温室で育ち、すいも甘いものすいは知らずに六十余年まことにいい星の下に生れた兄である。兄弟が奇しくも同じ趣味にたずさわつて二十八年、実に半生を川柳と共に生きて来た。いつもかげになり日向になり、私をかばつてくれ助ましてくれ引立てられ、故路郎先生の傘下不朽洞会員に推薦してくれたのも兄である。

先年物故された豆秋氏に見出され拔擢され今日の私に育ててもらひ生涯川柳と離れることの出来ない喜びをいつも感謝している。私等兄弟は川柳に惚れ女が好き酒を愛し、思想も主義も趣味も嗜好も性格もすべておんなじである。鼻の下が長く気の短いところもそっくりである。一見浮気っぽく多情のように見えるらしいが、全くの真実一路、ただ一と筋を守り抜くことを信条としている所謂純情派でもある。

兄は何を言うても先輩である。数多くの名句名作を生ん

でいる。殆どが体験から出た、実感の句で現実派の作家である。

——想い出の道は避けたし通りたし

——式すめば別居どころかこきつかい

——春雨に女房と濡れるあほらしさ

——例外もあつて人生おもしろし

等々実に枚挙にいとまがない、それにひきかえ私の句には凡作が多いことを自認している。なお精進し余世をかけて命ある句を一句遺したいことを念願している。

兄弟がチヨボチヨボであり恙なし

弟が負けて平和な日が続く



実姉・西出一栄

酒田 清子

この原稿を書くのにプリントの拾い読みしているうちに独特のニュアンスが一貫しているのを今更のように気がつきました。

——呼鈴の故障と知らず留守かいな

一栄

持つて生れたおとりさと恵まれた環境で作句出来る精
でしようか。

——玉串へ敷かれますとは言わなんだ 一栄

心臓が弱いので家内中腫物に触るようにしているので傍
目には敷くどころかどっかり大胡座をかいているよう
です。

——面当てに飲んで帰れば妻は留守 一栄

義兄の愛妻家と来たら有名で全く勲章ものです。姉妹で
今日まで川柳を続けて来られたのも理解ある協力があつた
からだと思います。

私は姉の工場を手伝っていますが、川柳のある日には、
「今日は川柳やろ早置いて行きや」との言葉に早速仕事を
置いて出かけるという具合です。

工場の従業員の間で姉のニックネームを石臼とつけてい
ます。うまいことつけたものです。「川雉玉造支部長」と
いってもすっかり西田柳宏子さんのお世話になりましたし
民生委員の仕事も判を押す位で義兄や若嫁が補佐役を相つ
とめています。自分ではたばたしなくても事がスムーズに
運ぶように出来ているから有難いものです。

——出しやばりへそんならお前やつて見ろ 一栄

私にはこんな軽い面白い句は作れそうありません。口
惜しいが今のところ私の負けです。入院当初三五キロだっ
たのが現在六七キロを前後して居ります。太ると姉さんそ
っくりだと皆から言われて居ります。病院呆けてしまっ

たのか、最近句が作れないので弱って居りますが、今年は
一つ馬力をかけて姉に負けずに白柳さんに叱られないよう
頑張るつもりで居ります。

実妹・酒田清子

西 出 一 栄

ある日阿茶先生から私に載いたお便りに、お姉さまによ
ろしく、とありました。妹は、「いやァよういわんわ」と
いっていましたが、其の次の句会の席で「私は一栄の妹で
す」と訂正しているのに苦笑しました。私は長女で清子は
三女なのです。したがって齢も九つ違います。それからた
またま二女の嫁ぎ先き(薬局)に居合せた清子に、お客さん
が「若いおかあさんですこと」と母親に見られたと憤慨し
ていた事もありました。それ程清子は老けて見えるらしい
のです。

西宮の運動具店に嫁いだ時は幸福な生活でしたが、主人
の出征中に家は焼かれ二人の子供の養育、おっつけ姑さん
の思い、持って行った荷物を惜しげなくすっぱり売ってし
まって、ひたすら主人の帰りを待っていました。

幸いにして終戦後無事にやっと帰った人はすでに胸をや
られていたのです。永い永い療養生活が続けさせるために
妹は働かざるを得なかったのです。老けて見える理由も

ここにあると思います。

——雑草に生きる強さを教えられ

清子

これが妹の信念だったのでしょうか。

いつも男装のような清子に、あんな男かいな、女かいな、と冗談にいわれた時、

「わてだっか、やっぱり銭湯は女湯へ這入るし子供はおかあちゃん、と呼んでくれまんねん」と答えた時、私は吹き出しましたが、やがて涙ぐましい感じが致しました。

私と同じく音痴は共通ですが、油絵も巧いし字も上手です。川柳に於いては視野も広く言葉の扱い方にはいつも感心させられています。妹の句は境遇のせいか暗い句が多かったです。

昨年の春頃から父の遺産のぜんそくになやまされてミイラのように痩せ衰えてきました。再三入院をすすめたのですが、間もなく生れて来る初孫を待つて頑張りつづけました。近所のお医者さんも力を入れていて下さるからとなかなか応じませんでした。

——音もなく影絵のように尼僧行く

清子

と言う句が私の胸を突きました。ひよっとしたら、と思いますと胸さわがしてまいりました。中の妹に相談をして無理矢理に入院させる事にしましたが、勿論二女の主人や私の夫も協力してくれました。ピラミッドから発掘してきたようないか、といわれた程でしたが、お陰様で親切な主治医に恵まれて次第に快方に向いつつあります。

——快復へ拍車をかける孫が出来

清子

今では清子の主人もすっかり元気になりまして南区のある商社へ勤めに出て居ります。

可愛い孫も手を振るようになり、息子は目下花嫁物色中です。気のゆるみから出た疲れで患った事と思います。

もともと朗らかな生れつきですから、全快の暁はこれまでと違って明るい句が出る事と期待致して居ります。

——車ならボンコツ級を療養中

清子

義弟・辻白溪子

正本水客



大鉄川柳の古い句報を開いてみると昭和二十三年の秋頃に「いさむ」のネームで登場し十二月から白溪子を名乗っている。

——ミスポリスびりびりびりとやや得意

と最初から素直な句風をみせる。同君の母思いの真情と誠実な性格にほれこんで、私の妻の末妹を無条件推選し

た。行掛り上、私達夫婦で仲人を引受けることになって日取も決っていた処へ、戦後の無理がたたったのか私が肋膜炎で倒れ生れて始めての病院生活三カ月、式を延ばそうというのであったが、それではオチオチ寝てもいられないので、こちらから頼んで予定通り挙式して貰ったのも思ひ出である。

その後、米子、天王寺と各地を転任して三十七年にまた大阪で一緒になった。翌三十八年は大鉄局に川柳が芽生えて丁度三十年、その三月に私が国鉄を定年になるので、水客在職のうちに送別の名を表に出さずに記念の会をやろうと、二月三日節分の日、小雪の舞う京都の嵯峨邸、(きこくてい)で三十周年の記念大会を持ったが、その準備万端を卒先して引受け、当日の進行も殆ど一人でやって呉れた。参会する者九十九名という数も皆んなを喜ばせた。私が国鉄を卒業するに際して、仕事の面でも川柳の面でも全く後顧の憂なく托することが出来たのは真とに幸せであった。

——腰据えて飲む気揃うて風呂へ立ち

私とは反対に斗酒なお辞せずであるが、大きく崩れることがないのは頼もしい。

——立てかけるだけで屋台の戸がしまり

はしごの果てにも観察眼は失わない彼である。

——麻雀をしてる別室からのベル

その腕前もなかなか人後に落ちない。白溪子の名も、その住んでいる所と麻雀に由来するものである。

——人事課のはしくれだから逆らわず
一本気な性格だが、世渡りの如才なさもしっかり身に付けている。

年に一回、仙台で宮島でと開かれる国鉄川柳人連盟の大会には父上帯同の孝行者でもあり、家庭では二人の男の子のよき父親でもある。

最近、凝っているハミリの作品をお目に掛けて、この稿を終る。

——夕映えを突き刺すように塔が立ち

義兄・正本水客

辻 白溪子

水客さんを初めて知ったのは復員をした昭和二十一年四月からである。当時上司であった氏が昼休みの机上へ投句を擧げて選をしていたが、面白そうなので覗いてみたのがきっかけで川柳入門の動機になった。

終戦直後の殺伐とした社会であっただけに共鳴というか川柳の味が忘れられなくなったことは事実であるが、水客氏の人柄に引かれて指導を受けたという方が本当かも知れない。無口な目立つことは好まぬ人柄だが川柳に対する情熱と熱心さは柳界第一人者だと私は信じている。

昨柳社から始まった大鉄川柳が三十年の歴史を経て、昨

年二月記念大会が京都において盛大に開催されたが、その偉業のなかには多くの先輩の功績も見逃せないが、矢張り水客氏に負う処が多く、殊に記念句集「杉の子」の編集には古い句報から二百余人の作者をまとめる等大変な労苦を鮮やかに処理され、卓越した才能の持主でもある。句集を路郎師に届けたら早速返事がきて「九天」「山雨桜」氏の作品を喜ばれ、大変だったと思うと労苦をねぎらってもらったことがある。

水客氏の作品については私から紹介する必要もないが、綺麗な上品なものが多い。お茶漬の軽い味とでも云うか噛みしめてみてよさが解る不思議な魅力が句に溢れている。古い句報から二、三好きな句を掲げさせてもらうことにする。

——人形箱こけし倒れたままに病み

——人生を生きる不慣れな酒を酌ぐ

——秋の陽がとどかぬ奥に鈴の音

又旅好きで旅に關した句が多く、出張先の宿で屋外の景色へ目を向けながら小さくたたんだメモを拵けて作句し、やがて疲れてそのままの姿勢で寝ていたのをよく見受けた。自然を愛し、旅を楽しむ氣持が人柄と相俟って名句が生れるのだろうと思う。

次に人柄をもう少し掘りさげてみよう。世話好きという言葉があるがとかく人間は損得を考えて振舞うものであり世話やきにまで及んで嫌られる場合が多い。彼は世話好きであって世話やきでない。困ったことを知ってて打明ける

てくるのを待っているというタイプである。

迷惑がかかることが解っていても頼まれれば嫌といえない性質で人を決して疑わない善人である、嘗て私の母が亡くなった時、金が必要なのではないかと聞かれたことを未だに憶えている。そんな人柄であるから平素から後輩に対する心の配りも行届き随分世話になった者もいる。さて水客氏との兄弟縁であるが、妻を世話して下さいと頼んだら探すのが面倒だったのか、私の将来に期待があったのか、家内の妹はどうかということに相なった次第である。

丁度川柳入門の時であったから同時に師弟関係もでき、勿論雅号も名付け親である。その後米子へ一年、天王寺へ十年と転勤で大阪を離れ作句も怠けていたが、水客氏が退職のあとを大阪へ帰って嗣いだら、川柳の用事も委せられて仕舞った。それ以事本社句会は勿論、国鉄関係の附近の句会には努めて出席しているがもう一つ身体がほしい程忙しい。幸い水客氏は退職後も句会には必ず出席され、川柳塔社同人も多数いるので大鉄川柳の将来はきわめて明るく功績第一人者である水客氏を義兄に持っていることを非常に心強く思い益々健康で活躍してほしいと願う次第です

・執筆者・

川村 好郎・松江 梅里
酒田 清子・西出 一栄
正本 水客・辻 白溪子
石倉 旅風・寺田 花宵

義妹・寺田花宵

石倉旅風

私が川柳のせの字に触れ初めたのは大正十三年の春か。京都の柳誌「京」を手にして兼題「煙」に投句した頃からで、その句は、

——春の山煙まつすぐ立ちのほり

然しこの淡彩が果してどう採られるかと思つていたところ親友の日之出新聞記者鴨涯亭から一度投句して見るよう勧められていたのでふつと是を出して、後で天に抜かれた事を知らされたのであったが、流石に選者とは素晴らしい何と味のあるものよと感心さえした事を覚えてゐる。作句法の端も覗いた気持でもあった。

当時私は京都壬生寺の近くに住み大胆にも「潮声」なる詩、短歌雑誌を独りで発刊、桜材に墨痕も麗々しく掲げた看板は「独笑詩社」思い出がここに飛んでベンが途端に軽く二るが追想の糸は断ち切り、目標に対して舵を直さねばならぬ。こんなことに無中になり乍ら短歌の縁も有つて現在の妻と結婚した訳でその家内の妹が所謂「きようだい」なる寺田花宵であると言う次等で家内よりも彼女の方が川柳の道を辿るようになったとはまことに世の中の仕組み不思議なものである。

私は句会で「夫婦作家」が肩を寄せ合つて作句に熱中している場景を傍観するのが好きで、殊に、夫全没妻は天、的なシーンなどは格別妙味のあるところと思つていたから

何とかしてと家内を口説いてみたが、その同伴の望みは残念ながら果敢ない夢と消えてしまった。けれども今川柳作家花宵が生れて、私達の家庭に川柳の灯をかき立てて呉れるようになった事は何としても嬉しい。そして此処にも世の中の妙を感じる。

夫婦作家には、めようとの、兄妹のそれには、きようだいの味があつていづれもプラスになる点が多いものと思われる。然し女流にはその特有のセンスとニュアンスでもつて、時に秀句を吐くから兄たる者常に油断禁物、仲のいい好敵手の存在と謂う可きである。いづれにしても彼女は花宵の、私は旅風としての作風完成の悲願に対つて真直に精進を続けなければならない。花宵も更に前進してせめて近親中の者から「川柳」の金色の灯を絶えさないようにしてもらい度い。昔純情可憐なる美少女、今気丈なるティルムのマダムでこの希いはキット不可能では無いと信じて私は齡を重ねつつある。

——スピッツもいつしよにひいた秋の風邪 花宵

——氣の長い恋にコヒが二つ冷え 花宵

今老婆は入院中で花宵は毎日豊中から病院まで見舞ひに通つていてくれる。入院の報らせをした当日は折角の客をすぐ追ひ出してしまつて駆けつけて来たとか。私はそれにもまだ一言の礼も述べて居ない。只川柳的な心境で心の奥底での感謝は忘れない。勝手ではあつても無言の感謝でそこはきようだい作家なればこそそのプラス面の一つで彼女も私同様の心でその真実を汲んでいて呉れるであろう事を信じて疑わない。入院後一応落ちつき句あり、

——五号室いく度ドアを開け閉めん

旅風

私は此の手で幾十度目かの、病室のドアを静かに開けに行かねばならぬ。短冊を掲げてくるためにも。川柳を恋人として、苦勞ばかりかけ続けさされて来た老婆は其の時、いつものように、そんな顔もみせず私と視線を合せることであらう。

義兄・石倉旅風

寺田花宵

私が川柳に興味を持ち初めたのは、さあ何時頃の事であつたでしょう。義兄旅風が昔大阪日日新聞社のカメラ川柳に投句して、出せば大抵優秀句になって、何故か気に入らぬように止めてしまつた時期のことかとも思われます。

川柳雑誌を見かけるようになったのはその後の事らしく更に後「川柳雑誌西成支部」が始められた時分、私も旅風に連れられてその梅志さん宅の句会や川柳文学の句会に出席するようになり、今もなお十年一日一向上達せぬ句会继续しているところであります。

義兄はいつも旨いうまいと煽てますが、川柳は好きは好きでも義兄のようにはとても夢中にはかりなつていられず素質の上でも自信が持てないなどのためつい歩調が乱れ勝ちです。しかし川柳の良さは判り好きな道の事として店の手も揃って運営の方さえスムーズにゆく時には、夜おそくまで時間の経つのを忘れて駄句を書き並べています。

義兄の宅をしばしば訪ねますが、姉とはあれからこれこ

れと尽きぬ話に花を咲かせます。こんな時義兄は後向きで川柳の作句や芳洲先生の吟詩教範を見乍ら微吟に余念がありませんが、それでもチャンスをとらえては私達の話に梗を打ち込むようにして、川柳を語り姉を苦笑させます。姉は何時かの豊中川柳の服部緑地での句筈に二句抜けた事があつて、やれば出来る環境に恵まれてのに余り作句には乗り気になりません。それでも義兄が句会に行くと言えば喜んで世話を焼いて大きなコップに好きなものを満たしたりしています。時々それよりこれがいいとか、こうしたらとかああ直せばなど助言めいたことをいったりして義兄を笑わせます。昭和二十四年八月十七日の句に

——ピンボンのリズム三角の音に冴え

旅風

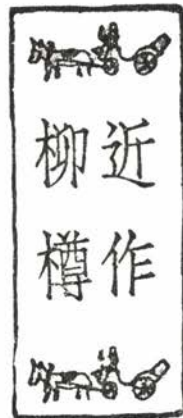
又九月四日欄に

——歳ごろへ母とは別な目を利かせ

旅風

がある。留守中日記帳型の句帳を覗いてみました。物の不自由な頃を語る用紙を使った表紙を皮にみせた大きな帳で発売所名も年号も背文字も何もありません。戦災にも焼けず不思議に思つて姉に尋ねますと和歌山県名手の山奥の親戚に疎開してあつたそうです。

世帯の苦勞は姉任かせで川柳に一生の大半を送つて来た義兄旅風は幸福だと私はいつも思っています。家人が寝静まつた時分を見計らつては懐中電灯でノートに句を書く姿は姉から聞かされて思わず吹き出したものです。川柳を中に挟んで旅風一家は平和な家庭です。内孫七才の悪口でおいじちゃんぼうやといわれております。



川村好郎選
菊沢小松園選

大州市 堀 内 曉 風

招かざる客も来ている祭り客

はつたりも効かず素性を見すかされ

良心がチクリ結論に踏み切れず

信号機赤もどかしいのも師走

老らくのせめて我がまま言える幸

倉敷市 水 谷 谷 水

右側をたまに歩けば轢かれかけ

建て増しの子はスリッパをうれしが

正調ネとお酌にまでもあなどられ

デイトした息子のツケも払わされ

愛媛県 関 本 柳 剛

その中の一人みどりを惜く着る

盃に妻と子の顔ぐつと呑む

其からの布団を深くして涙

八起せん八起せんとして去年今年

羽曳野市 谷 垣 史 好

枸杞植えて療養目下長期戦

霜の朝納豆つくる僧素足

膝上三寸そのスカートが脚を組み

ようしやべる女うつすらヒゲがある

大阪市 吾 郷 玲 人

寒風を突き かけもちへ行く師匠

スモッグが消えた夜空へ寒い月

求人欄女子は優遇されている

尼崎市 海 士 天 樹

盲愛の隙を無心が覗いてる

猛犬の鎖 集金たじろがず

清貧の樞勲章飾られる

島根県 堀 江 正 朗

健康な寝顔初日にのぞかれる

せりあげる声で港の朝があけ

うま年にあやかり景氣を蹴つてはし

島根県 堀

江 芳 子

初日の出夫に見えぬまま二十年

失明の夫へ勝氣がふと淋し

いいことがありそう子らの初笑い

笠岡市 木

山 要 次

打算して女自由に出す涙

名刹へガイド有難い声を出し

かみそりを信じてくれて眠る客

大阪市 和

田 痴 亭

十代の抵抗エレキへ火と炎ゆる

子の数に頭そろえて秋刀魚焼き

極道の果てか流しのギターびき

大阪市 今

井 岳 太

伐採の音は哀しい断末魔

肩車怖がつてるのはパパの方

絵心でみる裏町の豊かなり

仙台市 平

野 光 道

ベトナム戦どうあろうとも忘年会

清貧を誇る汚職もできぬ人

なるようになれと朝湯をする師走

七尾市 松

高 秀 峰

家風にも何時しかなれて松の内

嫁が来てからは三猿主義になり

老眼で入れ歯でしかも呆けはじめ

岡山県 藤

原 秋 月

言訳のところがかすれたボールペン

頼信紙一氣に書いた良い知らせ

とつときの祝辞を無口が言つてくれ

尼崎市 岡

本 昭 三

日曜を待つてたように妻が病み

治るとも云わず外科医の無表情

へそくりがあつて家計簿ややこしく

布施市 坂

東 若 芽

大晦日退院する人はいる人

梅活けて静かな心墨をする

高知県 山

川 勝 子

裸の木寒さう糞虫ぶら下り

暴落の野菜へ農家の愚痴も添え

神戸市 吉

田 隆 史

宝石に溜息かかる零の数

阿呆な事徹夜語つて酒肴

松原市 守

屋 万 竿

寄り添うたムード警笛がつき破り

嫁入りの足しにとボーナス手をつけず

堺市 斎 藤

雨 中 庵

懲りた筈のにまたダウ値に耳をかし

いざいざを組合まかせて年を越し

大阪市 西 本 保 夫

税務署を勇退 変な目で見られ

麻雀を知らぬ主任で押し通し

竹原市 三 宅 紀 世 美

素晴らしい夜明け呷々の声高し

あきらめた音で熟柿地にかえる

鳥取県 鈴 木 村 颯 子

妓から女房操縦法をきき

俺だけにはない座布団へ劣等感

北九州市 三 上 春 雄

勇退の美名でとにかく追い出され

新薬のテスト悲しい記事となり

鳥取市 近 藤 秋 星

入院の甥が気になる今朝の夢

スタートは一緒どの辺から遅れ

大阪市 栗 田 くり 坊

小判が出るから人間のみにくさが出る

愛情の代償が金になつて終る

大阪市 森 本 良 夫

かあちゃんと呼ぶ日の父は上機嫌

忘れもの届けにゆけば無愛想

大阪市 西 川 誓 二

導かれ自分も登る川柳塔

二十年平の椅子での暖かさ

大阪市 豊 河 好 永

社会見学とかでつき合うバー・キヤバレー

口ほどに気兼ねしてるとも見えず

大阪市 北 野 清 二 郎

漫画読んでたら勉強すんだんか

新年号の付録これでもかこれでもか

玉島市 井 上 旭 峰

抵抗が罪なき石を蹴つ飛ばし

愛情と愚痴と未練がゆききする

小松市 田 島 健 二

たかが特急に妻喜しがり

出雲市 森 山 健 太 郎

所長出勤ストープの輪が崩れ

京都市 大 久 保 安 彦

勇退の名にあまんじて間借りする

八代市 永 松 道 雄

御用納まつすぐ帰るのが惜しく

倉敷市 水 粉 千 翁

一歩ずつ有為転変の枯葉踏む

河内長野市 森 本 黒 天 子

長生きをせよと年金ついて来る

松江市 岡 崎 祥 月

十二月借金のない身の軽さ

松山市 河本 南牛史

植えかえて自慢庭木枯れかかり

長崎市 甲斐 筑柳

乗りかえて訛が巾をきかしだし

今治市 小笠原 雄堂

イヤリング今日もきれいな嘘で生き

羽咋市 三宅 ろ亭

卒直はとんだ誤解与えてた

大阪市 坂川 有子

変つてる人だとどつちも思つて居

茨木市 高木 繁太郎

豪華殿建てて高飛車で来る奉加

伊丹市 芳岡 正弘

せつなさを星は相手にして呉れず

尼崎市 吉川 いつ子

生理日と知つてか寮姉さからわす

愛媛県 澄本 満子

あの目付きどうやら過去を知っている

大阪市 天野 もやし

寄附をする何物もなく献血し

竜野市 森下 峰子

心中はいやと免許を馬鹿にされ

鳥取県 山本 かずこ

気の毒な話に同調した素振り

竹原市 小島 和幸

勉強をしますラジオ聞きながら

大阪市 小川 一美

大阪の空お星さんどこへ行つた

芦屋市 咲岡 みどり

新春を赤字で迎え考える

香川県 伊藤 歌子

寒菊が隣りのバラに話しかけ

大阪市 筒井 ふさ

手を取つて孫に明治の芸教え

大阪市 木村 濁水

忘年会下戸の隣りに席をとり

大阪市 田治 一登

年玉につられて好きと云うてくれ

大阪市 谷沢 源川

北向きに寝かされていた旅の宿

大阪市 休庭 一休

年の暮れ市場は声で買わせる気

大阪市 上林 清

親子とも二号で暮らす仲のよさ

大阪市 多田 富士

年寄りはお里場にこまる年の暮れ

西条市 横山 秀吉

おじいちゃんと呼ばなきや遊んでやるよ

川柳太平記

(十二)

富士野鞍馬

児島高德

児島高德(たかのり)は、備前児島の備後守範長の子で備後二郎といった。元弘元年(一一三二)笠置の後醍醐天皇に、一族を集めて忠勤し、翌年、天皇が隠岐へ遷幸の途で、天皇を奪還しようとしたが、行きちがひになつて果たさなかつた。それで高德は、幾日も天皇の後を尾行して、一度拝謁して自分の心中を申し上げたいと思つていたが、その隙がなかつたので、夜、美作院の庄の天皇の御館の庭に忍び入り、桜の木を削つて

天莫空勾踐(天は勾踐を空しうするなし)

時非無范蠡(時にはんれいなきにしもあらず)

という詩を書いて、天皇を遙拝して、ひそかに去つた。

この詩の意は、昔中国の越王勾踐の功臣范

蠡(はんれい)が、遂に呉王に復讐させたという故事を引用して、天皇を勾踐に、高德を范蠡に見立てて、忠誠を披瀝したのである。

しばしかんがえてさくらをおつけつり

(安六義二)

はんれいにまけぬ気で書くたのもしさ

(安六智四)

時に范蠡桜の木不慮な怪我 (一一四〇二六)

桜の木四角な歌を奏問し (宝一〇松三)

桜木にちんぷんかんを書いて落ち

(拾五七)

と、それを川柳に作られている。

翌日、これを天皇は御覧になつて、協力者のあることを知り、およろこびになつた。

(太平記)という話は、今に伝えられて、劇

にもなっている。川柳はまたこれに興味をもつて作られ、

高德は筆の先にて蟻をよけ (八七16)
三郎は毛虫を筆ではらいのけ (四五)

と桜の木に毛虫の多いことから想像し、

高德は板行下のやうに書き (四八七)

唐にない木に唐の事書いて見せ (笈初29)

高德は書き損なふとまた削り(明三桜3)

木版の版木は桜であるので、それに附会しても詠まれている。また、

順礼のやうに高德書いている(二二30甲)

と西国順礼が札所で書くのにも見立て、

高德は鯉に酔つたふりで書き (七四12)

高德は鯉によつたらしく見え (七八12)

鯉にあたつたときには、桜の皮をなめると

治るといわれていたたので、それにも附会して詠まれている。

たのもし矢立の中へ桜散り (二七33)

忠臣の矢立の中へちるさくら (四三20)

高德の筆に桜の不審紙 (八一18)

勿論矢立は持つていたであらう。不審紙とい

うのは紅唐紙で、漢籍などの読めない箇所

へ、小さくちぎつて嘗めて貼つておき、それが

読めるようになったら剥がすのである。それが

桜の花片のようである。

天かうせんは落書の元祖なり(一〇五23)

落書をしたので高德名を残し(三五32)

と、これを落書と洒落、

桜さめせぬ忠言を児島書き (五四8)

花ものを言はねど高德の忠が知れ

桜木を削るは八重な忠義なり
(九〇36)
(五八23)

なごこの忠誠を讀んでいる。

名の高い桜備後と薩摩なり

(六〇5八九30)

忠度と高德花に名をとどめ

(四七15)

薩摩守忠度の山桜の額は「千載集」に入れ

られて有名であるのでそれと並吟している。

また、豊後節の流れの富本の紋が桜草であつ

たので、

備後は桜木ぶんごは桜草
(六四5)

という句もある。

元弘三年閏二月、後醍醐帝は、隠岐を脱出

され、名和長年が、伯耆の船上山に迎えた

時、高德は一族を率いて馳せ参じたのであつ

た。

船の上名和で程よき締めくくり

(一五一13)

その六月に、天皇は京都へ還御になり、建武の中興となつたのである。忠臣児島高德は唄にもうたわれている。

高德は、實際、院の庄の桜を削って詩を書

きつけたのではなからうが、このことは「太平記」作者の創作であらう。山陽の「日本外

史」もこれを採用して、「是に於て、夜、帝

の館に入り、桜樹を白けて之に書して曰く」

と書いている。

・雑詠・

将棋だおしに計を聞くも秋

淋し秋

猫のイゴイズムがイゴイズムな

人と住み

偶然と平和

★

蜘蛛の巣に蜻蛉が一匹ひつかつた。

まるで磁石に吸いつけられたよう

に……此の偶然は誰も説明が

出来ない。世の中の出来事も、

大きな自然現象も、みんな、こ

の偶然に支配されている。

★

★

ねたまずに、誇らずに、人の

悪事を思わない心ほど合せな

ものはない。誰にもおかされな

いこの平和を、ジッと大切に抱

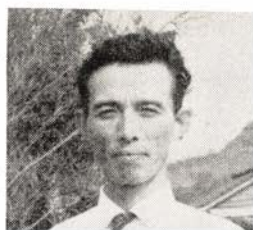
★

・麻生葭乃・

雅号ぶっちゃければなし (7)

ウドウ・ハウセン

HOSEN



うどう・ほうせん

・有働芳仙・

川柳を始めて知り、どうにかコツが
分り出したのが昭和二十五年頃、何
とか自分も雅号なるものが欲しいと自惚れた。丁度
その頃住んでいた村の名称が芳野村で、芳野村の頭
文字の「芳」を第一字に据え、第二字目に迷った
が、この村は標高約四百米位の所にあり、雨の日な
ど雲界に閉される事が多い所から、仙客来り遊ぶ雲
外の嶺なる詩句の「仙」の字を頂戴し、「芳仙」と
して今日まで愛用している。

教員・五十歳

「きのうきょう」

一万歩

本多柳志

◇私の知っているある大会社の社長さんが、
昔から又この頃は例の、一万歩運動というや
つで、会社への往復に決して会社の車を使わ
ない。

「私のような会社での運動量の不足なも
んには、往き帰りに歩くという事は、健康上

一番いいことでんね。朝の中之島公園なんか
ほんまにあんな素敵でっせ」という。

東京のえらい人にいわせると「大阪もんは
馬鹿だ。大会社の社長ともあろう人が、会社
に何台も車をもっているながら、わざわざ歩い
ている。健康の為というのは体裁のいい言い
訳で、本心は車や油の消耗を気にしているケチ
根性だ。第一クタクタになっては、いい知恵
も出まい。それだけマイナスだし第一社員か
ら見たら、ずいぶんイヤ味だ」という。

社長ともあろう人が、社長のくせにといっ
た、東京式の凡てに権式だった物の考え方が
目につく。

◇先だって四国の何とかいう中学校の女教師

が、ミスコンテストに当選した事が、大きな
問題になって、教育委員会や学校へ色々、
いやがらせや投書が来たという事だ。そう云
えば私の子供の通っている中学校でも、女教
師の服装がPTAで一時問題になった事があ
った。いくら身だしなみか知らんが、あれで
は女生徒のおしゃれ心をシゲキして困る。い
くら若い女でも先生やないか。マダムやらホ
ステスと見境いのつかんような服や化粧は困
る。というのである。岡やき半分の他の女教
師あたりがたきつけた事か知らんが、人のお
しゃれ心をシゲキするような身だしなみの出
来ないPTAの女達が、其の尻馬にのっての
騒ぎだったらしい。

先生のくせに、屋台店のかんとだきを喰べ
てはった。こんな事が問題になるようではぜ
んざい喰べて問題になった漱石の「坊っちゃん」の二の舞いだ。

◇よく「先生のくせに」「工員の分際で」
「大臣ともあろう人が」という。どうしてこ
んなに色々人間を別扱いにするのだろう。
みんな同じ人間ではないか。先生だろうが、
工員だろうが大臣だろうがおしゃれをしたけ
ればすればいい。かんとだきが食いたければ
食わしてやればいいのだ。それから先は夫々
の先生なり、大臣なりが人間としての良識で
判断して、やめた方が良くおしやれなからやめ
とけばいいのだ。先生だから、大臣だからで
はなく人間だから。世間の人の目がそんな観
点に立って問題を判断するようにしたら、世
の中もっと住みよくなると思う。

教師きょう女はたちの眉を引き

東と西に

日本一の顔

不二田一三夫

頬かむりの中の日本一の顔

水府

この短冊のかかっている四畳半の部屋で冬の間は仕事をするにしているが、別に深いわけがなくてのことではなく、毎年冬になると、この部屋へホームコタツを置くからである。眠くなって、そのままからだを横にする

ると、寝室にもなるという便利な部屋で、ちようどその頭の上に水府先生のこの短冊がある。

頬かむりの中の日本一の顔は、いうまでもなく、先代中村鵬治郎の紙治であることはだれでも知っているが、長谷川幸延の「法善寺の人々」を読んでいるうちに、アレ、と思わず、目が針づけにされたところがあった。名句というものは絶対「動かぬ句」であることときいていたが、この鵬治郎が動いたのである。

多くの好きなこの名句の句碑は道頓堀中座の東がわのそば屋「今井」の入り口にあるのだが、東京から来た幸延氏の友人に、そこを

通りかかったとき句碑を示し、「どや。感じ出てるやろ」というと、幸延氏の友人は、「なるほど」と大きくうなずいたが、つづいて思いがけないことをいった。

「橋屋ッ、といったくなるナ。羽左衛門の直侍、日本一だ」と、書いてある。

東京人で頬かむりの中の日本一の顔なら、先代市村羽左衛門の片岡直次郎を思い浮かべたのであろう。とくに雪の降る入谷の道を思いうかべ、句碑の建っているところが、そば屋とあっては羽左衛門の直侍とむすぶほうがしぜんでもある。

しかし、日本一の顔なら、鵬治郎にウチワがあがりそう、やはりこの句は動いていないように思った。

雅号ぶっちゃけばなし(8)

川柳を始めたのは昭和二十四年、まだ市制にならない頃の町長に禿堂

ナタ・ミツロウ

MITURO



・那谷光郎・

なた・みつろう

の雅号を持った人が居た。その人は可なりな禿頭で私も立派？な禿け振りであったから、その一字禿をとって禿郎とつけたのだが、川柳の指導を受けた先輩から、それではあまり露骨で芸がないと、禿を光に変えてくれたので光郎(みつろう)今となれば他に同じ雅号のご人に気付いたが、のんのんと今日に到っている。

雅号とは逆の句作をうれしがり

医師・七十一歳

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3452-114
夜間 06 4400-8

教室句作

研究題「注意」



清水白柳

この作句教室も毎月なので原稿を書き終るともう次回の投句が来ているという訳で投句なさる皆様も御忙しいことだと思いが、それに励まされて楽しくペンを採ることができるのは嬉しいことである。

ヘルメット頭上注意の札の下

S

頭上注意見上げた途端踏みはずし

秋月

足許に頭上に注意他は知らん

露鉄舟

思い切り打つて御注意憎らしい

露声

ヘルメットの句は工事現場で見たことを描いていゝのだそれだけに終ってしまった。踏みはずしという句は少しどぎつい感じがするのだがどうだろうか。他は知らんという句は面白い、その他のことは各自が注意したらいいとつき放したような作句の仕方がよくあった。思い切り打つてという句にはユーモアがある。それは下五文字の憎らしいという作者のあらわれ方にあるといえるようだ。

バスの事故それから父母が喧ましい
注意無視起るべくして起きた事故
注意して注意に注意それなのに

旭隆史
郎峯

不注意の自転車事故で詫びて済み 文平
バスの句にはそれからという語があるので救われたということが出来る。起るべくしてという句には少し理屈めいたところがあって惜しいと思う。注意に注意の句には何の注意なのか具体的なのがあらわされていないが捨て難い味を持っているのが面白い。自転車事故の句はよくまとまっている。詫びて済みの五文字が物語りをしめくくっているからであらう。

内ポケット注意したのに金が消え 千夏
ラツシユアワー注意してたに財布なし初子
注意していたのにスリは愚痴こぼし 正朗
内ポケットの句は、注意したのにとというところの誰かに注意したことにもとれるが、注意してたに、とすると自分の事になると思う。ラツシユの句はだれでも思いつく事で平凡だった。スリの句はスリ自身が捕まった愚痴のことであるが、スリは、の、はをにとするとスリにやられたということになり反対の句意になるので考えてほしい句である。

デパートで泣き声以上の母の声 皆無
隣の子注意をすればアゴしやくり 美代
デパートで子供に注意している声が殆ど高く
て耳についたという句意なのだが、ほんの思
いつきに過ぎない句のようだ。隣の子の句は
よくその情景を描き出して成功していると思
う。

愛する故の注意子はうるさがり 孚彦
注意みな覚えていれば子は伸びず 芳子
母親の注意リユックが聞いて行き 与志
愛する故のという句には真実があるけれど
も叙法がもう一つすっきりしないのが惜し
い。子は伸びずの句は適確につかないでいる
ので佳句になっていると思う。リユックの句は
背中で聞くという句もあったが、リユックで
あるために、遠足か登山かのどちらかなのだ
らうと思うが、どちらにしてもリユックが生
かされているといえるようである。
いわねと黄色い合羽送り出し 万平
傘させば黄色の帽に要る注意 湖志
遅刻した一人を待ってたママの旗 与志
いわねという言葉で注意という題を表わ
しているのだが描写は浅いといえる。傘の句
は黄色い帽子をかむった子供に通行人が注意
するか、子供自身の注意を詠みこみかけたの
か少しあいまいな点があるように思われた。
遅刻の句には黄色い旗を持って学童をせかし
ている姿があらわれていると思う。
母親のさけびを背に子は転び 弘生
いい着想をいい表現であらわされている。
貧乏ゆすり親の期待が叱りつけ 徹也

注意した時だけ貧乏揺ぎ止み 章 雅
いつも注意されていながら癖となると仲々
なおらないものだ、それをこの二句は詠んで
いるのである。

注意するのめ控え目な反抗期
反応注意しつつ反抗期を叱る

H 弘 道

十代の耳を素通りする注意
扱いにくい反抗期のことを詠んでいるのだ
が三句共いい句だとは言えないようだが、こ
の中では、反応注意の句が光っている。

ドツク入りすめた医者の不養生 S

注意する医者にも紺屋の白はかま K

S

注意してくれたお医者が先に逝き
こんなことがあるかも知れないが皮肉も度
をすぎではないかと思う。

注意のしようも分らずガン恐怖
なぜ注意せぬと繃帯叱りつけ

みさ子 露 声

ガンで死ぬ人のなんと多いことか、自覚症
状がないので注意のしようもないのを作者は
句にしている。繃帯の句は家庭での出来事を
うまくキャッチした句で成功している。

上役の注意は頭の上を過ぎ

T

上司からの注意はまわりくどく聞き

Y

おや指を出せばストーブ散つて行き 箴柳
上役の句も上司の句も着想はよいのだが句
にまとめるのが安易に過ぎたようだ、もっと

表現の方法を考えるべきだったと思う。おや
指を出すといえはその職場での上司だろう。
それをうまくあらわしているの句がよくな
ったといえるのではないだろうか。

あるだけの注意しという汽車にのる 美代

ふり返り火を注意して旅に出る 句楽坊
こまごました事にも気のつくのが女性の句
であり、火の元のことを殊に注意するのが年
輩の男性であるのも面白いと思う。

親子ほど違う巡査に注意され

秋 月

ふり向けばオイ君だよと注意され 静 水
どの句にも苦が笑いがある。注意されたの
は大した事ではないので作者の苦笑が句を通
じて読むものに感じられるわけで佳句であ
る。

猛犬に注意はそつちがやつてくれ 痴 亭

犬を飼っている家へのレジスタンスである
わが顔の汚れは見えぬアドバイス 安 彦

人間の弱点をついている句といえる。
注意報出ていることなによい天気 正 朗

着想の広さで成功している句。
よく見れば裾のしつけを抜き忘れ 静観堂

静観堂

そんなに慌てなくともよいのにと作者は泰
然自若として見ているのであろう。

注意して見れば一桁多い0(ゼロ) 芳 子
何と安いと思ったら0が一つ多かつてガッ
カリというところ。

注意した矢先だったと役所言い 万 竿

事故が起きてからでは動き出さない
のがお役所仕事、それをズバリとついている
注意する女房がいるという安堵 弘 朗

弘 朗

これは恐妻家ではなく愛妻家なのだ。
御注意を感謝しますと聞いて居ず 滋 雀

滋 雀

自分には自分なりの意見があるのだ、それ
を注意されても通り一べんの挨拶ですますの
だ。

子の積木最後の一つへ息を止め 与 志
注意深くのせるその一つへ全神経を集中し
ているのだ。その横には親も真険な顔付でい
るのが目に見えるようだ。

注意して言葉尻つかまれる 弘 道

弘 道

揚足をとうとう待ちかまえている相手では
手に負えない。しかし注意だけしなくてはと
いう処。

鬼となり仏となつて注意する

隆 史

注意したその唇元に見えるが、そこに温かさ
憎くて注意するのではない、そこに温かさ

第15回西大寺会陽川柳大会

日時 2月19日(土) 午後五時半から

場所 西大寺市鐘紡北門前、鐘紡労働会館

兼題 「声」 大森風来子選

「群集」 服部十九平選

「男」 清水 白柳選

「窓」 池田あや子選

「情熱」 萱野 竜児選

兼題席題締切 六時半

会費 百円(投句だけは10円切手三枚)

出席者には川柳手拭をおくり呈賞多数。

投句先 西大寺市松新 松崎瘦浪人

主催 西大寺川柳社

協賛 サンケイ新聞社岡山支局、川柳

岡山社、西大寺文化連盟

後援 岡山県、西大寺市ほか

明治川柳と風俗



(九)

・奥津啓一朗・

貸馬車

記録によると明治五年三月華族官員の乗用馬車は九十九輛、町中渡世分十一輛という寥々たるものである。一昨年末自動車は六百七十万台、その六分の一、百六万台が東京に集中し、四・五年さきには乗用車も百軒に十数台になろうとする現代とは比較にもならない。黒塗金紋の箱馬車、山高帽子の馭者に黒鴨仕立の馬丁、毛並を揃えた二頭立の駿足を駆って、丸の内界隈や銀座通りを威風四辺を払い疾駆していたかと思うと愉快だ。

二頭立葉巻の香り後にして
郊外へ馬車を走らす麗かさ
也奈貴 好風
合乗りの馬車を親父もふりかへり
峯月
馬車を見て金のおかけと嘆息し
渭月
乳母の里見馴れぬ馬車に人集り
一風
本邸へシツシツ空車の二頭立
依々
その頃築地の川西商会がはじめたのが貸馬車業で、当初は口の悪い連中が、あれは貸馬車だよとお里をあばくので、乗る人もなんとなく肩身も狭く、需要も少なかったが、外人客や新橋停車場への送迎等、その便利さから次第に繁昌し、後には築地馬車商会となった。

を感じるのである。

親切なつもりで注意溝つくる

明子

こうした事がよくある。お互いが気をつけたいものだと思う。

眼のつむり方にも厳し禪のムチ 八九寸
修業のつらさ、それも将来への温い鞭なのだ。

母親は大人の注意をわれにする 久柳子
作者は若い学生であるからこうした句が出来たのである。

肚のある人の注意が身にこたえ 保夫
注意されおこつてみてるてれかくし久柳子
注意する父の声父とはなりぬ 孚彦

肚のある人は、父でありまた上司でもある。そして注意されて、てれかくしに怒ったふりをするのは甘えているからであらう。父の声父とはなりぬという作者の感じには共鳴するものがある。この若さが頼もしい。

黄信号もうエンジンの音をさせ 松風

焦らだっているのは車を運転している人だけではないのだ。句はやや平淡のようだったが注意などさりと歌で受け流し 初子
これでは若さに負けてしまいそうだ。

注意の目流行色を見のがさず 柳恵
流行遅れなどに目をつけたのではない、今年はこの色だと見つけたのだ。

弟に注意の出来る年令になり

鴉石

原句を少し替えてみた若さの出ていないのが気になるのだが。どうだろうか。さて最後に一句お目にかけて結びとしたい。その句は注意してくれたはことが済んでから 安彦
というのである。以て範としたい。

四月号発表・締切二月二十日

研究題「乗り物」

五句以内

五月号発表・締切三月二十日

五句以内

研究題「鼻緒」

大阪府南河内郡美原町丹上四〇四

清水白柳

寢息

西出一栄選

遠足の夢見る 寢息へ編みつつけ
老夫婦何の 気兼ねもない 寢息
遅刻することも知らずにいる 寢息
寢息が 止んだと思えば 寢言言う
すやかな 寢息 夜業の手がすすみ
にっこりと 寢息へ医者が部屋立ち
気疲れの 寢息を妻に 聞かすまい
キャンプ村 寢息へ若さ 溢れそう
叱りつけたことを詫びる 寢息聞く
寢息出て ママのサンタも 来ると
起すには 惜しい 寢息や 除夜の鐘
子の 寢息 パパは何か 言うて撫で
忘年会 寢息を立てて 置いてかれ
泣く 表情 笑う 表情 して 寢息
終列車 夕刊の下 寢息 たてろ
酔ばらいい言いわけ聞く方 寢息立て
合格す 家中 安心 した 寢息
初孫の 寢息は 甘し 起し したし
寢息さえ 止まる 飯場の 隙間 風
飲んだ夜は 寢息と 寢言では だん
寢息から 見れば 悪人らしく ない
何の夢 荒い 寢息を 揺り 起し
妻や子の 寢息 失業 切り出せず
お土産は 寢息こわさず 置いてやり
顔色と 寢息で 母は 子を 育て

独仙 藤波 季 晃 男 宗太郎 天樹 正明 健太郎 芳子 秀光 保夫 八九寸 勝子 弘道 弘道 双雲 七面山 明子 章雅 芳朗 木魚

手術台 医師に まかせている 寢息 藤原秋月
越年の 余裕が 出来た 寢息する 句楽万
骨組みも 癖も似て来た 子の 寢息 弘朗
演出の 寢息と 妻に 見透かされ
安らかな 寢息へ 明日が 待って 居り 旭峯

住

狸とは 知らぬ 寢息へ つまみ 食い
除夜の 鐘待ち した 子の 寢息
タヌキ 寝の 寢息が やんだ い話
へそくりの 横で 平和な 寢息 立て
疲れて 忍び 他愛のない 寢息
留守番が 火鉢を抱えて いる 寢息
家中を ひっくり返して もう 寢息
大厭び しかいて 寢息で 間を作り 三時
貸し借りもなく 安らかに かく 寢息
はったに 寢息がかかる 程も たれ 古柳 方

人

交代の 寢息へ すきまなく ゆり 起し 大江秋月
みちたりた 寢息を 抜けて 米をとぐ 章雅
ネオン 一 消え 大阪の 寢息 古方
意地悪を 言った 寢息でない 姑 軸

代書

弘津柳慶選

恩給で 喰える 代書の こせつかず 藤波

本

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話 三三四四番

ひら 仮名の 代書が 胸を 打つ 無心
上手でも ないに 代書を 頼まれる
代書しても ろうて 書体 氣に いらす
悠々と 代書 時間 間に 合せ
代書屋の 女房 駄菓子 を 隅で 売り
代書人 眼鏡 越しに 用を 聴き
客でない 客も 絶えない 老 代書
相続の ことで 代書の 智恵を かり
代書人 愚痴を ききき 墨を すり
恋文の 代書 讚美の ありつ たけ
寄生虫の ように 代書屋 役所 前
下手な 字で 代書屋 裁判所 を 通し
たの まれた 代書の ハガキ まき かせ
代書して やって そば 杖喰わ される
一坪の 部屋から 代書 世を みつめ
豆炭を かかえて 代書 客を 待ち

秋月 季夫 幽谷 初車 勝子 八九寸 勝子 弘道 弘道 双雲 七面山 明子 章雅 芳朗 木魚

表札も三下り半も書く代書 宗太郎
代作し代書して代読もさせられる 光道
家の恥さげて代書に来た落目 弘道
母さんの代筆候文で書き 健二
代書する手紙へ文句あとやさき 芳子
大臣の祝辞代書を代読し 正朗
金釘でも良いと代書は署名させ 章雅
火鉢一つ置いて代書の無愛想 魚山
真剣な恋へ代書の笑われず 久雄
代書人機械のように書きあげず 恵二朗
胸を打つ代書ではない母の文字 明子
代書してもらう文盲の人の良き 多蘭子
代書人役人の様な口をきき 多蘭子
代書屋は制限漢字にこだわらず 十九平
代書とは知らず名士の額を掲げ 専翁
代書頼む程ご病氣も重いらし 七面山
代書屋に裏の裏迄教えられ 保夫

佳句

一万歩

本田恵二朗選

一万歩 ますます足が太くなり 策柳
一万歩 我が家が見えて息を入れ 弘朗
一万歩 胃腸の首尾をまた聞かれ 歌水
一万歩 運動一人へり二人へり 保夫
一万歩 デモで鍛えた脚があり 秋月
自家用車無い抵抗の一万歩 藤波
一万歩にも慣れ夜の高いびき 章雅
ぜい肉をおとす苦勞の一万歩 勝子
老夫婦歩調あわせた一万歩 十九平
一万歩 時計へみんなの歩が揃い 芳子
下心あって議員の一万歩 弘道
一万歩 まだまだ生きたい顔が寄り 七面山
彼奴が歩くから僕も歩いた一万歩 明子
一万歩のコース言えない訳ができ 春雄
一万歩 どこかで小鳥鳴いてくれ 旭峰
福路さん大師と一緒に一万歩 双楽
茶店からなかなか出てこぬ一万歩 千翁
ほんとうに空気がうまい一万歩 七面山
一万歩 名もなき寺の鐘をつき 健太郎
一万歩 お菜の愚痴をもう言わず 静水
歩け歩け犬の鎖もといてやり 十九平
孫たちを家来に連れて一万歩 芳朗
停年の暇が一万歩にいどみ 天樹
一万歩 稼ぎの足に追い越され 八九寸
トイレへの足も万歩のうちに入れ

佳吟

それ それに思惑がある一万歩 七面山
好きな娘がいたらと思う一万歩 麴光
一万歩 膝上十糧の娘も交り 十九平
一万歩 犬の鎖がピンと張り 幽谷

一万歩 ビルの階段まで数え 古方
人 位
一万歩 町を出てから歌になり 隆史
地 位
一万歩 エスカレーターでも歩き 可住
天 位
一万歩 ですかと朝の山で会い どんたく
軸 吟
一万歩 齢はかくせぬものぞ知り

★お願い★

各題用紙は別々にしてください。締切後の作品は、のりおくれることがありますから投句は早目にお願いたします。

色紙短冊
書画用品

大坂戎屋

丹 青 堂

電 南 セ 二 セ 二

第百七十七回 大萬川柳

新年度
第五回

「抜け道」

入選発表

選者 清水白柳
投句総数 五百六十二句
入選 六十五句

松原 白扇

尾行した方が抜け道不安がり

パチンコという抜け道の恐妻家

大阪 万里

愛媛 砂生

利権屋の抜け道大物かつぎ出し

抜け道をあけて与党の質問戦

堺 一舟

瀬戸 文平

人物の違い抜け道ついて来ず

抜け道を子供の智慧に教えられ

東京 泰造

新潟 凡生

抜け道を教え汚職を意識する

抜け道を考え義理で見る見合

奈良 十恒

堺 雨中庵

方角がねえと抜け道こさえられ

どうせザル法ですよと悪るびれず

児島 恵二朗

倉敷 照路

抜け道を作ってやおら倒産す

抜け道を出てゆったりとした歩巾

大阪 琴女

大阪 旅風

抜け道があつて拝観料をとるお城

その道の古手顧問におく会社

岡山 十九平

丸亀 ゆずらん

築城の秘密抜け道口伝とす

犯罪へ或る日有利な黙否権

藤山 可住

泉大津 徹也

抜け道は金持ちだけについていた

抜け道を黙認しとく時機を知る

松原 万竿

豊中 古方

蛇の道はへびと抜け道封じられ

大阪 章雅

遊飲税客も抜け道異存なし

石川 宗太郎

大物は任意出頭だけで済み

大阪 春果

抜け道の地図でいねいに描いて

和歌山 木魚

抜け道を塞いでおんな強くなり

泉北 好郎

本店がまましいのでと貸ししぶり

高槻 静馬

抜け道の稼ぎ追徴金でファイになり

大阪 小松園

職もないくせに抜け道だけは知り

小松 芳明

抜け道も知らず定年恙なく

広島 露声

こんなものまで経費にしと会計士

抜け道が通れるだけにする地主

抜け道も昔のままの城下町

大阪 竹荘

通行止めの抜道叱られても通り

抜け道を知って子供のかくれんぼ

大阪 水客

抜け道は八坂の塔の見えるところ

合法の限りを税理士の手が這入り

岡山 七面山

抜け道をあけて名將包囲する

抜け道を塞がれた空巢観念す

和泉 東天紅

抜け道は犬も知ってか先き走り

本絹と正絹抜け道ありそう

加賀 光郎

抜け道にカニの逢見蟹の穴

ドヤ街の抜け道おしめくぐらされ

笠岡 忠三

抜け道を妻の先手に封じられ

抜け道は妻が出がけにくれた智慧

富田林 東雲楼

越境に妻子離別という手あり

抜け道はだまって立てる指の数

富田林 美房

選挙法抜け道だらけにして可決

抜け道の方が混んでる安全デー

大阪 柳志

弁護士が来て抜け道が高うつき

抜け道は市会議員へ聞きに行き

南河内 吸江

盲腸の手術ぐらいに判をとる

抜け道のツボを税務署見逃さず

盲点をつかれ警察お手をあげ

島根 代仕男

抜け道を逃れた足で礼に来る

抜け道の手蔓を探す住所録

抜け道へうなきのようにすっぱ

大阪 阿茶

抜け道で大きく儲け露路に住み
境内に抜け道のある法善寺
抜け道を通ると犬に吠えられる

五 客

笠岡 要次

抜け道の細工に妻が笑いこけ

大阪 庸佑

ニアンスにその抜け道を匂ううらなれ

大阪 梅里

抜け道へ右折禁止の札が立ち

大阪 痴亭

逢曳きの抜け道墓を縫うてゆき
抜け道の一つはあけて罫をかけ

人ノ句

大阪 梅里

抜け道を見て見ぬ振りの眼が笑い
地ノ句

布 施 清人

抜け道があつて赤線灯を消さず

天ノ句

大阪 水客

抜け道のメモを渡して座を外し

選者吟

格式の違いが抜け道として通ぜず

大萬川柳ベストテン

(二月現在)

一

二

三

四

五

六

七

八

九

一〇

一一

一二

一三

一四

一五

一六

一七

一八

柳志一〇〇
美房九五
桃里八五
万竿八五
圭井堂八〇
木魚七五
宗太郎七五
清人七五
小松園七〇
静馬七〇
東雲楼六〇
痴亭六〇
可住六〇
阿茶五五
きさ子五〇

二月の句会
光郎五〇 加賀
二月の兼題「苦笑」
発表 二月二十日
次ぎの兼題「図書館」五句以内
発表 二月二十五日
発表 三月二十日
投句先 大阪市阿倍野区松崎町三ノ十

大萬川柳会

★

注意 締切日が変更されましたから期日までにご投句下さい。
締切を厳守いたしますから切角の名句が没にならないように。(係)

二月の句会

玉造川柳会

時 十日(木)午後六時

所 美人、ドラマ、寒風

玉造交差点南一〇〇米

大阪信用金庫階上

時 十日(日)午後六時

所 アベノ区松崎町三ノ十

素振り、腹、惜しい、記念

割烹 大萬

詠

その知性女冷たく構えてい

名を告げぬ善意素早く姿消し

病人の若さ喚って寝ていびき

写真屋に柄はめられる借衣裳

気乗りせぬ見合いの素顔買われてい

須坂市 高峰 柳 児 松山市 月原 宵 月

サンドイッチマンの歩調が合わぬ暮の街

仙人掌と石が孤独の味方する

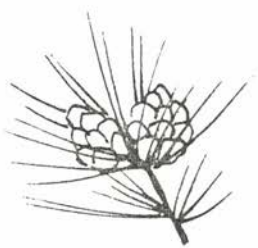
ホステスの朝は男の焚いた飯

即席ラーメンここにもひとり受験の児

髭を剃る男うしろで愚痴をきき

雑

柳 界 展 望



・ 橋 高 薰 風 ・
(担当)

☆山路関古氏（東京都）は「せんば」二百四号に「俳句向う上の道」として次のように書いておられる。川柳人にとっても味うべき言葉とおもわれる。

「俳句を民衆慰楽の域から文学永遠の道へと向上させるには連句の修練が必要である。連句を潜って来ると俳句も一段と深みを増し、文学作品としての鑑賞にも堪えるようになる。」

連句の修練は大変である。多読、多思、多作の課程を経るのは勿論、天狗の鼻をへし折って、謙虚にして柔和な人格を形作ることに要請される。これを俳人格という。自分にそう言い聞かせている。」

☆麻生霞乃先生は奈良県生駒町の長男アート氏居で越年されたが、近來とみに健康を回復されて暖くなる四月頃には本社句会にも出席出来るだろうと楽しみにしておられる。

☆長野井蛙氏（防府市）は胃かいようで一月五日県立中央病院内科へ入院され手術の宣告を受けられた由、ご全快を祈りあげます。

☆大鉄川柳会（大阪市）忘年会会は12月19日（日）午後一時から甲子園口弘済会寮で。

☆時の川柳忘年会は12月12日（日）に祇園神社で。

☆札幌川柳社第九十六回例会は十二月八日に。

☆「馬」十二号「流木」三

号（「海図」にも掲載予定のこと）は日車を偲ぶ会の模様にはスペースをとられている。路郎先生と交友の深かった日車翁の句は当時の革新派といってもわれわれの理解の及ばぬところのものではない。偉大な先輩の忌には伝統、革新挙げて故人を偲ぶようにありたいものだ。

☆正木竜樹氏（金沢市）は陶鼓と改号された。

☆小西無鬼氏（兵庫県）は非常に多忙で、公用の会議にも出席を怠りがちで、朝五時から、夜十一時或はその以後でないと床に入れぬ状態のこと。

☆前田喜代人氏（下関市）は「うろついてうんざり逐

に酒となり」と午歳の新春を迎えられた。

☆川端柳風氏（東京都）は高須嘯三味氏のおとをうけて「川柳論講」の世話役を引受けて下さる由。

☆阿部佐保蘭氏（東京都）は、全国の川柳家の声を多数レコードやテープに録音愛蔵しておられるが、正月の休日を利用して、「紀元二千六百年の声」を「オリンピック前後の声」を編集された。後者には昭和三十七年七月上京の際吹込まれた路郎先生の川柳朗読、「二階を降りてどこへ行く身ぞ」

「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」「春の僕ただ良寛を志す」「凡聖一如元旦のこころ知る」などの十句と、霞乃先生の「飲んで欲し止めても欲しい酒を酌き」「ヒヤシンスの音沙汰でなしパンのこと」など五句がある。佐保蘭氏はなお、生々庵主幹をはじめ北川春果、河相すむ氏ら川柳塔同人諸氏の声をお聞かせ願えればと云っておられる。

2月の句会

時 題	所
かがみ川柳会 二日（水）一時 「役割」・「詳細」 「事後」・「愚問」 「見当」	池田古心居
明和研究句会 二十日（日）一時 「紋章」・「マフラ」 「自由吟」	所 阪神鳴尾駅東南二百 米 鳴尾公民館

☆浜野奇童氏（岡山県）は1月22日夜のNHKテレビ「それは私です」に弓削川柳社の川柳角力行司として出場され大好評だった。2番の奇童氏を当てる人のなかったことも痛快だった。

☆第二田一三夫氏はNHK第一放送1月31日夜の「今晩は大阪です」へ執筆、こんどの出演者は夢路いとし喜味こいし両氏。

☆川柳塔の若柳潮花氏（高

概市)の句を読まれた白牛

奇朗氏は二十年ぶりに通信

され旧交をあたためられ

た。なお潮花氏は日立造船

の一級検査官を定年退職。

日舞の師匠に専念されお弟

子さんも増え順調にいつて

いるとのこと。

☆山田季賛氏(高槻市)は

十二月四日五日の両日、国

鉄新幹線鳥飼基地で労苦を

共にした旧友と伊豆の伊東

温泉で会い楽しく交歓、思

い出話に花を咲かせ、「波

の音と磯の香宿の朝があ

け」と寄信された。

☆河相すゝむ氏(西宮市)は

「ふあうすと」増井不二也

氏夫妻、「番傘」の松本波

郎氏夫妻、海士天樹、吉本

善風氏らと一月一日から四

日まで南紀白浜の「やわら

ぎ」でのんびりとした新春

を送られた。

☆橋高薫風は旧臘風邪を押

しての無理がたたり肺炎を

おこし二週間病臥、元旦に

は気分を新しくして、生駒

に霞乃先生を訪問、新年の

ご挨拶を申し上げた。すこ

ぶるお元氣なので川柳塔の

ためにお力添えをお願いし

ておいた。

☆田中狂二氏(堺市)長男

実氏は昭和四十年十一月十

八日山形県鶴岡市の佐藤洋

子さんとの良縁整い住吉大

社で華燭の典を挙げられ

た。お慶び申し上げます。

☆不二田一三夫氏(大阪

市)の二女檀野茂子さんは

一月七日女児分娩。また三

女薄子さんは日本交通公社

勤務の西田利晴氏と二月十

四日華燭の典をあげられ

る。重なるおよろこびおめ

でとう。

☆若本多久志氏(西宮市)

は恒例の正月ドライブ旅行

に夫人同伴で浜名湖、知多

半島を一周、帰路犬山市の

明治村を訪れ、つぎの句を

寄せられた「ああ明治 明

治の風のなつかしや」

☆宇和川木耳氏(布施市)

からの寄せ書きに「大八君

と共にふあうすとの句会

へ出ています」本誌でおな

れてはじめて「ふあうす

と」の句会に出ました。大

井正夫氏は「三宮生田神社

の「ふあうすと」句会から

一月三日」そのほか、徳

三、言也、嘉矩諸氏らの本

誌へ激励の言葉があった。

☆鷹果一子さん(東京都)

から12月29日付けのハガキ

をいただいた。

「御詠川柳塔を本日いた

だきまして、まことにあり

がとう存じました。本日は

故高須嚙三味の七七日にあ

たりますので、何かと思ひ

出も多く悲しゅうございま

す。御礼かたがた。

☆光好陽子さん(岡山市)

のご母堂が十二月五日逝去

された。謹悼。

☆村上光輪氏(大阪市)の

ご母堂は十二月十七日逝去

された。謹悼。

☆馬場魚山氏(小松市)夫

人清子さん(49)は十二月

二十六日乳癌で他界され

た。柳人を代表して旧小松

同人村井城南氏が花輪一對

れた。謹悼。

☆川柳研究社句会部の地番

が、東京都葛飾区新小岩一

丁目五六の三・三浦三朗方

に変更。

新同人紹介

小笠原 青女

一水、一三夫推進

長野 文庫

一白柳、生々庵推進

岡田 彰男

一三夫、生々庵推進

疲れに!

アリナミンFにB6・B12を配合

アリナミンA

神経痛・便秘・心臓病にも



清風 宣古多清摩潮花鳥小摩玲凡一金双季天好た庸正美静言多滋梅水静八
人選 介方志人天 花 梢 莊 園 郎 人 郎 三 樂 贊 樹 樹 み 佑 則 房 波 也 志 雀 里 京 馬 郎

薰梅多玲葉一句恒愛
風志志人舟樂坊明論

とんたく
水生々
夢夢客
夢虹樹
天虹樹
飄太遊
舟松遊
小松志
梅志彦
弓宏彦
柳宏彦
靜宏彦
好宏彦
柳宏彦
恒宏彦
恒宏彦
失宏彦
静宏彦
八宏彦
舟宏彦
野宏彦
古宏彦
み宏彦
阿宏彦

千一潮花多好專庸一一白喜形宣醉水鉄野多清失多双梅天昭水滋章愛東東八
乃乃久志乃乃溪乃舟風水介升京舟菜人人名樂志樹三京雀雅紅天雲九
梢字花江梢志翁佑字舟風水介升京舟菜人人名樂志樹三京雀雅紅天雲九

八木 摩天郎 選

摩誓生弓弥水い季多潮清一静柳愛梅栞梅一小一花阿花み一静専栞金与柳季古旅八
郎二庵彦生客む賛志人夫馬子論里志舟園栄梢茶梢よ栄歩翁三志子賛方風郎

野た一梅水鳥言静清たいどんたく 玲古すた多白天鉄一金舟花昭一吸一萬梅八醉靜東
つ 菜み栄吉家荘也波人み 人方むみ志柳樹舟舟三遊梢三夫江舟の里郎升馬紅
花選

久志選 潮玲玲花 八寸 吸江夏 繁太朗 多蘭子 東雲さ 一三夫 阿茶論 清愛郎 野好菜 句樂坊 古文秋 野松園 小乃菜 季里替 梅江菜 野菜里 吸房江 美翁房 專樂翁 双郎 好郎



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

岡鉄川柳会

(岡山県)

浜田久米雄報

自叙伝は運だけでない浮き沈み泣き叫ぶ遺族運では済まされず手遅れも運がなかったことにされユーモアがちよっぴり効いて妥結す薄給の父ユーモアな子の笑い芯のある強さユーモア持ちつつけユーモアをまぜてやんわり断られ腹にないことだと酒のせいにする太っ腹意外なわなにひっかかり反対の毒舌俺をねらって来いれぢえが否 反対の強くなり母ちゃんの反対父の口を借り反対をした子の嫁の世話になり発車ベル家出淋しい音で聞き発車ベル旅情を刻む音でなり発車ベル立寄りポツンと残されるユーモアの判らぬ人に誤解され

備前川柳社例会 (岡山県) 横山一声明報

一 鳳月 秋月 飴ん坊 あきら 正一 静水 久米雄 哲郎 照路 美舟 静水 一 佐加恵 諺士 三平 胡風

人前は他人の ような 口をきき 他人から見ればもうかるように見え 他人から見ればはがゆい 親心 他人事と思えず 記事に腹を立て まだ 他人行儀の うちを姑はめ 手ばなした山で 他人に 儲けられ 他人様にやるには惜しい娘に育ち 仲人は 他人をほめて ほめて去に 嫁の腹 他人の 方が 先に 知り 今日からは他人ではない床を敷き 共稼ぎ 駅から 他人の 顔になり 他人さまに聞いてもらって眠り 他人事と思えぬ 交通事故の 記事 礼状に そえて 一筆 また 無心

まつえ句会

(松江市)

舟木与根一報

職場のはげぐち 妻や子にあたり 午后にする 約束それは 夜があり はげぐちの なくて会社社の 待機制 小刻みに点滴つづくも 日のベッド はげぐちのように ベトナム利用 小刻みな と言ふもおもる物価高 失言の たった一字を 替えてすま いはげぐちのある 停年をうらやまれ いい嫁が来てから 出好きな母と

むらくも川柳会 (島根県)

藤井明朗報

仲人の 言葉に 感謝の 眼が 笑い 肉親も 軒をわかつては 利子をとり 夜警員 寒い 夜中に 元氣よく いたわりの 言葉と 熱燗が 待つ 夜警

水 仙 一声 静女 君子 飴ん坊 伊久野 正洲 芳月 秋月 胡風 久米雄 浄美 知水

仲人の手間は とらせぬ 自由主義 一桁の 利子 学校の 貯金帳 仲人の 嘘を 仲よく 笑い 合い 子供会 夜警へ 一役 買って できる 掛取が 競って 歩く 十二月 銀行の 利子 わずかでもある 生活 浄財の 利子が 英才 育て あげ 目で 合図して 宴会の 席を ぬけ 仲人をする モーニング 借り 歩き 柔道 三段 夜警の アルバイト 預金 利子 物価 高には 追いつ けず 臍繰りを 貸して 葉の 利子が だんろの 火 静かにも えて 夜警の 夜 夜警の 灯 露路の 夕餉 を 見て 廻り 十二月 締め きた 暮し むき 仲人が 忙しく 帰る いい 返事 宴会の 帰り 課長に 送ら せる 気易さの 借金 利子が 高 う つ き 宴会で 課長 話せる 人 に され 霜柱 踏んで 夜警の 朝を 知る 吹きすさぶ 木枯し 夜警の 声も 絶ち すえ 置き の 利子 を そ つ くり 又 預金 表彰は 内助の 功も 影に 添い 師走 師走 俺の ふと ころは 寒い よ 新しい 赤字 年 越す 十二月 宴会の 唄で 不思議な 縁 結び

高知川柳社

(高知市)

川竹松風報

間違った 愛から 子供 ぐれ は じめ 間違いを 笑って 僕は 弟で す 舌打ちをして 間違ひへ 斜線 引く

白 汀 俊 夫 芳 子 加 代 澄 美 雪 風 無 介 夢 草 鶴 丸 孝 華 一 郎 鶏 生 昌 水 輝 水 勇 朗 正 朗 清 泉 清 夢 醉 歩 き み 江 好 男 晃 男 祥 月 明 朗 冬 樹

兄弟の名を間違える 子沢山

窓月

ボリーナスが出たかはずんだ靴の音
靴音は確かハズだと針を止め
トタン屋根 音程雨は降ってとらず
脱稿の疲れ 初発を耳にする
奥さんの言ったおでん屋で見つけ
今は盛り 秋刀魚の味 覚秋深し
長生きは大事がられて邪魔がられ
壁に向いて無想に生きる術が欲し
ド忘れをする日も多い 十二月
愛かなし 残る理性は捨てきれず
やりくりに関係のないこの笑ひ
おやつ代子の掌で汗をかき
生字引 重宝がられ邪魔がられ

美和 吞洋 雪枝 桂雨 紅生 蟠蛇 寛風 夢迎 嘉子 句念坊 勝子

大阪通信病院川柳会

森下愛論報

駅弁の土産になった 箸袋
旅の味まず 駅弁で かみしめる
世話好きがいて 駅弁を呼んでくれ
駅弁を土産に 持って 駅を出る
モデル料とるでと末っ子めけむ
わが娘にもほしいモデルのあひ目
モデルの名秘して 実話の週刊誌
診察の結果 薬また一つ ぶえ
診察に もう 年頃と云う 体
廻診日 花 活け かねた 枕もと
診察をするなり切るにどきとし

夏生 よしを 春果 十方 路児 良夫 竹莊 勝利 史葉 草右 没食子

交通局川柳会

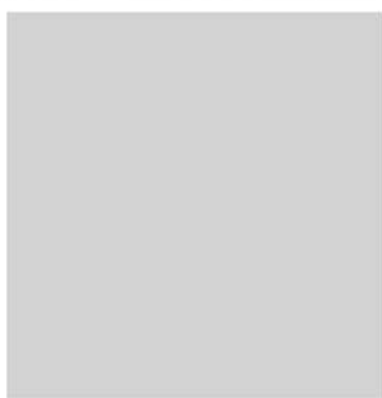
(大阪市) 児島与呂志報

洛北の紅葉へ冬装束して 出かけ
忠告を素直にうけて よろこばれ

春果 淡舟

病人の心があせる 師走風
貧しくともいいの笑いが満ちあふ
結婚と決り 気兼ねのない二人
天高く娘の 箸も 気兼ねせず
気兼ねなく 予科練唄う 酒になり

一乃字 孤舟 清流 隆史 松亭



気兼ねせんときと 先に 箸を割り
運動場 外野 はみ出て 球を待ち
朝食べた切りで 気兼ね寝つかれず
胎教は 利口な子にと 親の 態
病床で 菊一輪に 話かけ
菊づくり その日ぐらしに 目ゆとり
トビが 鷹生んだ 利口な目鼻だち
カーテンを降せば 気兼ねない二人
菊作る 名人 やっぱり 頑固者
お日柄の ふるえる 誓詞へ 菊匂う
住みついた 童話オルガンからの

三十四 ゴーゴー 正則 洛醉 みのる 一歩 胡蝶 鉄舟 のぼる 六電子 天樹

大鉄川柳句会

辻白溪子報

引返す 決断 地図が にぶらせる
視線返して 女は見栄を捨てきれず
歌も出て 宴会らしく なって来た
ポケットに 辞表 出直す 腹はなし
出直して 古い 浮気も 笑ひ 草
言訳を 子供 不思議な 顔で 聞き
言訳を せめ子の 瞳が 澄んでいる
言訳が パーの マッチで ばれる 朝
言訳へ 妥協を すれば 金が 要り
音痴とは 云わす 素直に 下り 三の糸
飯庁 含すき 間風の 位置へ 坐らされ
すき間から 忙しそうに 妻が見え

求女 万的 静児 飛鳥 加泉 宗悟 一求 白溪子 杜的 季贊 水客

南大阪川柳会

金井文秋報

明けきらぬ湯に 旅の 遠さを かかせる
晩秋に 柿の実 残し 老母 ゆく
進学を 諦めさせて みな 熱り
柿の赤さが 晩秋の空 ひき締める
べしやんこの 乳房へ せうら子 の 憶い
大観の 富士に 実感 湧いて こず
こまでは 実感出でると 賞めて
寒う なりましたなあと 肩ちぢみ
アルバイト 酷使に 耐える 肩の 幅

水客 宗悟 飛鳥 尚山 求女 杜的 季贊 白溪子

親も娘も早いと思うた頃が華
スケジュール詰った中に顔を立て
ポーナスも二人で貯めて式近し
集金へ社長が出向く金詰り
ポーナス日妻と外食久しぶり
日記にも心の内はしるしかな
おかず詰った豆腐と子とい夫婦に
売れっ子の三味はだめだが顔先
ポーナスが出た足音を妻が待ち
ポーナスの予想はずれたコップ酒
やりくりを見てる女房も気が詰り
御手洗にこころ安まる水が湧き
場末には惜しいおんなに在る事情
売れっ子を呼ぶにお女将も借り
昭和っ子末のことより今日に生く
心とは別な笑顔で客を呼び
末はよしといとは八卦云わなんだ
顔見せただけで売れっ子金になり
とことんになってこころが
末長く約し三年目に別かれ
売れっ子に育て他社へ引き抜かれ
政治家はこころにもない目で見
売れっ子が歩けばサイゼめ
こころえていながら乗った口車

玉造川柳会

(大阪市)

西出一栄報

手術台メスへ男のあぶら汗
辛抱をせよと接骨医の力
マイッタと思わず言わす子の無邪気
神経痛社長の訓示聞きとれず
これに嚙まれたむかで見せに来る

野一 清人 静馬 文章 文子 水客 東天 柳志 滋雀 好郎 梅志 竹太 圭莊 八郎 あいき すむ 章雅 古方 万さ子 白里 幸柳 專翁

胃袋を掴み出したい汗をかき
セーターの赤さが似合う男の子
手にとつてうちの暮しとちと違い
連れだつて市場へ廻る共稼ぎ
買物を母に頼めば足してくれ
吉日と書いて結納は足りが足り
日付変更線越えるすべなし夜に
貸本屋日付変えたを見逃がさず
改めて日付見直す催促状
日付よりずれて新聞くる僻地
日付印廻して局の窓が開き
赤い影簡易保険が集めに来
集金日愚痴も一緒に貰うて来
納税のように集金集まらず
売掛をもうに拝む真似もする
集金に行つて返品ことづかり
集金へ居留守の影を掴まえる
清貧の指が鼻くそこねている
清貧へむごく札束積み上げる

午笛川柳会

(国鉄鷹取工場)

嵯峨野吟行

野仏の古さをあだしのガイド
嵯峨野路に柿点々と黄昏れる
嵯峨野の秋人にもまれてほこり
アベックが右往左往の祇王寺
夕暮を知らせる鐘が嵯峨の寺
祇王寺は藪と紅葉の錦織
一葉の紅葉を盗む嵯峨日記

富柳会

(富田林市)阿部柳太報

天樹 一歩 静菜 野舟 千葉 義介 白柳 清子 善三 秀芳 宏方 古馬 静更 文章 秋雅 立夏 賀富 津笑 季穂 美穂 初甫 同甫

菊はめてから聞込みに来た刑事
この秋はえん日の菊買いそびれ
タマに出た散歩菊盗人にされ
菊の葉を揚げてこよいは水入らず
菊活けてまだ見ぬ息子の彼女待つ
病室の菊の香うすれ妻遠し
菊愛でて不況に弱い三代目
菊はめておながすがついた言えず
菊はめりや又取りに來い取ら來い
菊折つたその手がおやつもらに來
買うほうがよっぽど安い菊が咲き
豊稷の祭太鼓に明ける幸
綿菓子に祭りの味を知った宵

美房 重子 一義 多代 美史 五男 栄一郎 吉太郎 八重子 吸江 柳郎

品質優良

タチカワペン



タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画鋏

大阪市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

小屋もひま 次の祭へ荷をまとめクレヨンが秋晴れの野をうつぱし秋晴れへ娘バレーの気が揃い秋晴れへ退院うれしく背伸びする紅紫淡彩野立ての美女へ秋が晴れ賞品の 中味をそつと 振ってみる特質は カラーテレビと二云う魅力賞品の 中味 わかつて いる 笑顔

どんぐり川柳会

(大阪市) 川村好郎報

ひとりごとですよと母のまとめ役ひとりごとで走る積木のひかり号独酌の 天下をとったひとりごとあいまいな 気持を決めた茶の柱あいまいな返事 夜務の 冷たすぎ市場籠さげてうろつひとりごとくやしさをしまつておけぬとひとりごとと位牌の前のひとりごと平等に 一行 でおる 電話帳電話帳で 住所調べる 内祝電話帳 商売 仇の多いこと強迫へ一役買った 電話帳電話帳 迷惑 そうに 隅に あり 休診の 弱味へあせる 電話帳電話帳 ないのも知らず 列に あり いやな客やつと帰してひとりごと停年の 椅子にさびしきひとりごとひとりごとまだ強情を張っており嬉しさは 心に持てぬひとりごと内心は 彼女に聞かす ひとりごと孤独なれたピエロのひとりごと

好 郎 喜 郎 金 三 は じ め 太 路 柳 太 六 竜 子 花 梢 草 春 圭 太 の ぼ る 琴 路 章 子 吸 江 斯 道 岳 太 胡 人 京 子 白 扇 静 波 弥 生 ツ ト ム 一 生 長 与 太 郎 誠 二 雄 峯 痴 亭

倒産の店に 淋しく 電話帳 大会社と肩を 並べた 電話帳 あいまいな態度ですまぬ仲となりひとりごと云々何にも買わず去に美智子妃と同日に生めと無理と云々

まるべに川柳会

(大阪市) 川村好郎報

茶碗まで 灰皿となり 宴終る 灰皿も 替えて 難航する 会議 会社から 灰皿 までの 命 とき あいまいな返事で勘定延ばしとき あいまいな素振りにのぞかす 恋心 あいまいな返事へ 組合また 騒ぎ 鍵不要 貧乏 世帯の この 平和 飲みすぎて又 あいまいな 詫言 入 あいまいな返事で連れ添う 破目 あり あいまいな グラム 親娘でまた 計り あいまいな 数字 部長に 見破られ あいまいな 天気 予報を 気に して い 癌 だとも 云えず ま あ お 大事 に

どんぐり川柳会

(羽曳野市) 川村好郎報

アルバムの過去を質さぬ妻でよし アルバムに残した亡き子のかげえ アルバムに妻も 妬けそう な 旅の 宴 母 なき 子 星 への 階段 は しく な り 階段へ もう 挑 ね る お 誕 生 アルバムに 貼る 手も 嬉し 晴れ姿 アルバムの彼女の 数ほど 彼も ぞ ず アルバムに 貼れない 人 を 胸に 秘め 二十貫の ママ が 上 っ て いる き し み

喜 風 東 天 紅 一 征 梅 里 好 郎 瓢 太 立 児 睦 児 巴 香 泉 陸 一 世 行 水 圭 月 鴻 里 扇 斗 好 郎 功 雄 生 長 青 波 芙 蓉 一 太 努 平 文 代 直 己

いい足を見て 階段で けつまずき 特売場 エスカレーター 駆けあがり 階段の手すりの 価値を 老いて 知り アルバムの 父しか 知らぬ 終戦 子 アルバムの ほこりも 払い 金婚式 戦没の アルバム 見れば 笑つて いる アルバムの ニキビの 青春の ころ しさ アルバムに 妻に見る 箇所 も あり 別れ来て アルバム ながめ 又 燃える アルバムに 仲よなら んだ 過去 人 療養の 写真 は 別 の 写 真 帳 ふと り す ぎ 間 借 の 階 段 気 が ね を し 階段に 人生の 歩み 教 え ら れ デパートの エスカレーター 乗 っ た 階 段 の き れ い さ 土 足 が 気 を つ か い 階段へ 尻を 気に する お 年 頃 屋上 に 近 く 子 の 足 早 く な り アルバムに 貼 っ と き ま す そ の ま ま

あすなる川柳会

山本素郎報

お預りしとくと 謝礼 その まん ま 思い切つて 妻に あたま を さ げ て 正月に 振 り ま わ さ れ る 十二 月 値上り を 便 乗 さ せ て 十二 月 ビールを 頂 っ て 見 合 悪 び れ ず ご 指 名 が か り ビール の 注 が ず 行 親 と して の 意 見 女 と し て の 愚 痴 子の 便り 来 て も 来 ん だ も 気 を 揉 む 親 を 見 て か ら 縁 談 も つ れ か け 割り勘で 行 く 二 次 会 は 失 礼 し

孤 舟 石 秋 白 扇 悟 空 道 夫 ボ ク 出 目 夫 伸 一 子 立 夫 万 里 早 霧 喜 風 ま こ と 太 郎 と お る 好 郎 好 郎 素 郎 よ し を 一 郎 福 枝 ゆ き を 慶 之 助 百 酒 弓 彦 梅 里

あすなる川柳会 (信貴吟行) 山本素郎報

献燈の百円 昭和も年をとり
ご信心なされと寅が首を振り
取り込みが済んで一本つける母
しもやけ温めてくれた手ぶさむき
からっぱの頭というている自信
食べるだけ食べて平和な子の寝顔
嫁ぐ姉 近頃母とだけ話し
この辺でやめとく肚が未だ出来ず
父ちゃんが寝て家の中 平和なり
円満はよしこの通り敷かれても
霜踏んで勝ってくるぞと征った

たけはら忘年句会

山内静水報

さよならと言ったとたん腹がすき
うれしい日夕焼とくに光ってる
そんな事平気とあの娘舌を出し
兄弟が揃いチャンネルうばい合い
妹の宿題 みんな悩まされ
ひやかしてさよなら声があとも追
いい夢をだまっで一何もなし
ペース快調今日の相手が小見え
オルガンのレッスンは猫がよしやっ
(以上高校生)
売る中の背に手を置いさようなら
恋人の電話はいつもクイズめき
くじ運がついてないので兄に引
剃刀のふと口髭を残して見
福耳へ 貧乏神がつきまとい

ゆきを よしを 万利 一枝 双楽 弓彦 慶之助 福郎 幸児 素郎 梅里 勝彦 日出夫 美利恵 浄美 廷子 悦子 清和 俊司 卓爾 吞竜 正紀 紀世美 松風

診て貰え貰え風邪と娘が案じ
捨てられた鶏頭の紅を活けてやり
バサバサ髪していてもムード派さ
病の子の素直な程がいじらしい
水摘のいつかは寝かせてくれる音
寒がりのくせにアザレヤ冬を咲き
交際費ばかりの ような十二月
ただ今へ夫婦げんかをあずけとき
新米の味 噛しめる土に生き
珍珍も 飛びでる 名士のたすけ会
あそこまでなつて 女のよく 稼ぎ
党のみに 民の叫びは 届かない
開腹と 度胸を すえた 手術台
末っ子が 先きに 恋人 連れていて
包装紙だけで 中身を 子等がある
また 米の値上 働く 価値が 落ち
ははひろく生きて主張を置き忘れ
ボナナスのお蔭しみじみ十二月
録音の テープに 三度び 湧く 拍手

★五八ページから!

大掃除のゴミ焼く間に年が明け
歌に更けエレキに明ける二十才
夜が明けてゆっくり煙草にも夜警
打明けるに恰好な場所を選び
水山に白夜が明ける 昭和基地
夜明けまで間のある駅にさされる
倒産も知らない空が明けており
夜の明けるうれしさ綴る 闘病記
寝つかれぬまま相宿の夜が明ける
馬市のセリから朝が明けてくる
常の日と同じに元旦明けてくる
秘密まで打明けあつさり裏切られ

春枝 房枝 和尾 春男 操居 青居 澄恵 澄恵 尚道 雅鳳 一武 季緑 松己 マスエ 政己 俊勝 房水 静水 梅郎 八論 恒名 玲名 失歩 静水 形舟 舟遊 失名 白溪

嫁が来て雨戸を開ける空の色
白々と明けて夜つづきの糸を巻く
玉砂利を踏む音つづき年明ける
京の宿東山から明けてくる
威勢よく帰る漁船に夜が明ける
明けもて去年と同じコマージュル
夜明け前猫は疲れて戻って来
明け放し人に好かきまだ嫁けず
口明けて寝るとこまでが父に似
宵越しの夫婦喧嘩へ夜が明ける
飛石のひとつとつが明けてくる
曇りなら曇りのままで明けてくる
きょうもはみょう字の夜が明ける
心の眼明けると拝むことばかり
明け方に口説き落したすき間風

*おわび

本社句会の入選句多数のため、見苦しい組
みになりました。
なお、城北明老句会報などを次号にまわしま
した。

宴会・折詰・出張パーティ

大 萬

町崎松区野倍阿
TEL 3935・7782
南區豊屋町三ツ寺センター
TEL 9184

宣名 失論 愛人 昭松 萬園 章雅 双楽 古客 庸佑 生々 多志

本社二月句会

日時 二月七日(月) 午後六時
会場 自安寺(妙見さん)
市電千日前下車スグ北側
(電話211・1478番)

兼題 柳 話
「三 角」 清水 白
「ゼ ロ」 河相すゝむ
「童 話」 小川 恒明
「重 い」 正本 水客
中島 生々庵 選選選選選
席題 三題(題と選者は当日発表) 各題三句
会費 百五十円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

電話大阪(271) 3985番

3月の 兼 題	「テコ入れ」 「間 食」	「凡 人」 「近 い」
------------	-----------------	----------------

GOLDEN O.S.K. の紳士服

スマートで
着心地のよい



株式会社
オーエスケー



・2 D K・

▼梅だよりを目に耳にすると、もうスグそこに若草もえる春が、出番を待っている。——早春。いいひびきをもった文字である。

▼柳誌は柳社の顔である。柳誌によって柳社が評価されるかどうかは別として、とにかく機関誌の責任は重い。早く良く安く、これが雑誌の三要素なのだからシンドイことだ。

▼やっと第三種郵便物認可、これでようやく一人前の雑誌らしくなった。

▼新年号の同人名簿から二、三

の方がもれたことをおわびいたします。まだほかにもありましたら編集部までお知らせねがいます。

▼原稿枯れの二月号だといふのに、未発表の原稿が山積されている。ありがたいことだが気が気でなく、ご寄稿たまわった諸氏に申しわけなく思っている。

▼同人特集の評判がよいので、次号には、まだ一度もご出場ねがっていない女流作家にご執筆を依頼した。たのしみである。

▼どうかすると、雑誌不着のおたよりをいただく。なかには月のなかばまで待っておられるそ

うだが、本誌は月末発行を敢行しているので早目にお問合わせくださるよう。

▼白柳氏が多忙で、「九輪水煙」がまたおやすみである。

▼麻生家から出たのではないが「川柳雑誌」五九三冊が古本市で二十万円という値がついて大きな話題をよんでいる。「川柳雑誌」の偉大さを再認識させられたことだが「川柳塔」もこれまで伸びたものである。

▼後記を書いた日、校了になった日、発送した日、このときのタバコはとくにうまい。あと二十字ほどでそのうまさが味わえるのである。(不二田一三夫)

定価 百二十円(送料六円)
半年分 七百五十円(送料共)
一年分 千四百四十円(送料負担)
昭和四十一年一月二十五日印刷
昭和四十一年二月一日発行

編集人兼 中島蓬太郎
印刷所 大陽印刷株式会社
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

電話大阪・二七一三九八五番
振替口座大阪・三三三六八番

募 集

四月号発表 (2月15日頃)

川柳塔 (10句) 中島実々庵選

近作柳塔 (10句) 西尾 繁選

課題吟 (各題10句以内)

一 龍 子 早川 誠生選

一 朝 職 山七 秀夫選

各 賞 田村 芳太郎選

★川柳塔の長局は本社同人に限りませ
★川紙はなるべく題意をご使用ください

五月号発表 (3月15日頃)

川柳塔 (10句) 中島実々庵選

近作柳塔 (10句) 北川 春典選

課題吟 (各題10句以内)

一 龍 子 山田 幸賢選

一 注 用 中島 小石選

交 際 長野 文庫選

★応募は四百字用紙に「四月号」又は「五月号」はかりで書くか、いしにしてください

麻生路郎著

浜田久米雄著

橋高薫風著

★ 新川柳鑑賞 ★ 句集 凡 人 ★ 句集 れもん ★

定価 250円・送費80円

定価 300円・送費50円

定価 500円・送費共

明日のために
今日ものむ

高単位総合ビタミン・ミネラル剤

ポポンS



シオノギ製薬



仲代達矢



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰

(化粧ケース入)
一、八リットル詰・一、二〇〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 釀



昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十一年一月二十五日 印刷
昭和四十一年一月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔 二月号

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広 東 料 理

豚 饅



焼 売

大 阪 な ん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋店・心齋橋そごう店・梅田阪神百貨店
天満京阪ストア・弁天阜頭港店・中之島サン・ストア

定価 百二十円

(送料六円)